孤高の一夏

アーチャー　双剣使い

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一夏は歪んでおり、ただただ強さだけを求める。

そこには忠義も大義もなし。在るのは狂気のみ。

目次

序章
強さに魅せられて ―― 1
一章
第2話 ―― 8
第3話 ―― 16
第4話 ―― 22
第5話 ―― 29
はじめての… ―― 39
第7話 ―― 49
第8話 ―― 60
第9話 ―― 72
第10話 ―― 80
Ne m'oubliez pas ―― 104
幕間劇 ―― 117
篠ノ之箒 ―― 127

序章
強さに魅せられて

俺は小学生になる前の記憶がない。
だけど別にそんなことはどうでもよかった、当時も今も。

小学一年生の時に俺は姉に連れられて、地元にある篠ノ之神社に行った。そこで姉は俺に篠ノ之神社にある剣道場で剣を学べと言ったんだ。俺は断る必要も理由も無かったから承諾したんだ。
それから毎日、剣道場に通うようになった。幸いに俺には才能があると道場の師範である柳韻さんに言われた。だけど柳韻さんにはこうも言われた。
「才能があろうと努力を惜しまずに鍛錬しなければ強くはなれない」
だから、俺は毎日道場で稽古し、家でも素振りや体力をつけるために走ったりしたんだ。それと勉学も疎かにするなと言われたから先に予習して余裕を持って生活してた。

俺は姉に、いや姉じゃなくても守られる側ではなく、守る側になりたかったんだ。

だから強くなりたいと思ったんだ。
ズキッと鋭い痛みが奔る
「何故そう在りたいと願った？」
――出会った少女が今にも壊れそうだったから――

ある時、姉が真剣を俺に手渡し、抜いてみろと言った。姉の目はどこか悲哀と慈愛を含んだ眼差しだった。俺が刀身をじっくりと見ているとこう言ったんだ。
「その重みを忘れるな。それが人を傷つけることの出来る力だということを」
そういわれたが俺は別のことに夢中だったんだ。俺はその刀の美しさに見惚れていたんだ。狂気を感じさせる笑みを浮かべて

その鋭利な刀身に、その人を殺せる物の重みに、それを振るう力に
俺は強くなりたいと心から思った。
それは義務感や恩義を感じたからじゃない。
ただ焦がれたからだ
まるでこの身に刻み込まれた呪いの様に、俺はそれを渇望したのだ。

姉はそんな可笑しな様子の俺に気づいていなかった。

それから姉に俺は居合の手ほどきも受けた。その時の姉の姿を俺は忘れない。

小学2年のある日、学校でクラスの女子が馬鹿にされていた。何時もなら気にしないが柳韻さんの娘だったので助けた。だが、それは間違っていたかもしれない。別にいじめを見逃すという意味じゃない。なぜなら助けた女子、篠ノ之箒はそれから毎日のように俺に絡んでくるようになったからだ。此方の都合も考えずに。

例えば俺が友達と話していた時も割り込んできた。後でな、と言っても無理矢理に俺と話そうとするんだ。酷い時は暴力を振るう時もあった。それが俺だけならともかく友達にまで手が及んだから、みんな俺を避けるようになった。

だから、前に箒に注意したら逆ギレされ、此方の言うことに耳を傾けない。柳韻さんに頼んでも効果はなかった。というかそのせいで俺が道場に通っていたことがバレた。

今まで道場の娘の箒に気づかれなかったのは、箒があまり道場の子供たちに馴染めず、みんなとは別でやっていたからだ。

バレてから箒は、俺が道場で稽古してる時にやってきて、構おうとしてきて稽古の邪魔になった。俺の姉が箒の姉である束さんと仲のいいこともあって、更に顔を合わせる

ようになった。
　束さんは基本的に大人しい性格で、気に入った相手には優しくて俺のことも気に入ったからと優しく接してくれている。だから俺は束さんには懐いた。なのに何故、箒はあそこまで暴力的なのかよくわからない。
　だから、柳韻さんにどうしたらいいかと聞くと、俺に個別で教えてくれることにしてくれた。その時にもっと心身ともに成長したら剣術と他の武術も教えて下さいとお願いした。俺は姉の教えだけじゃ足りなかったのだ。
ズキッと鋭い痛みが奔る
「何かを忘れていないか？」
――俺に沢山のモノを与えてくれた少女を――

　そんな生活が続き小学校の中学年に上がった時にいつのまにか姉はＩＳの国家代表になっており、周囲からは白い目で見られたり妬みの視線を受けるようになったんだ。
　当時は何故か分からなかったが、それは女尊男卑の影響で嫌な目にあった奴らが、姉がＩＳ界で有名だからと俺に理不尽な敵意を持っていたり、女尊男卑に染まっている女子たちは姉が国家代表でありその血縁者であることを羨ましがってたんだ。
　それからは友達と呼べる者も極端に減り、下心で近づいてくる者や自分の陰口を聞く

ようになった。教師も混ざっているから手に負えない。

時たま、俺に暴力を振るう奴も出てきた。だけど長年剣と他の武術を学んだ俺は、素手で数人を返り討ちにした。

そのことで学校に保護者でもある姉が呼び出された。

向こうからやってきたため注意で済んだが姉はそうも思っていなかった。姉の言い分では俺は武術を嗜んでいるのだから人を傷つけてはいけないというのだ。そして、いくら正当防衛でも人を傷つけたことには違いないと叱るのだ。この時俺は素直に謝った。このまま言い争っても埒があかないからだ。

その時から俺は姉に頼ることを、信頼することをやめた。

俺は姉に不信感を抱いたのだ。

理由は明白だ。姉がＩＳの国家代表になったからこの問題は起こり、しかも姉は学んで強くなった剣の力でその座に上り詰めた。そのＩＳはスポーツ用というがそれは建前であり、大会では自国の作った兵装を見せ合うこと、本質は操縦者同士で傷つけ合うことだ。

姉は国家代表で忙しいからか家に帰らない日が増えた。

淋しいと思った日々などなかった。ただ只管に強く在ろうとした。

ズキッと鋭い痛みが奔る
「何故苦しくなかった?」
――あの少女が寄り添ってくれたから――

小学四年になり箒たちは引っ越すことになった。束さんがＩＳの開発者という事が関わるのだろう。箒が居なくなって俺は嬉しいが、柳韻さんが居なくなるのは困った。
しかし別れ際に柳韻さんは俺の家の近くにある、私有地の大きな山に家があるからそこにこれから通うように言った。

後日、俺はいわれた通りに山を登り、その家に向かった。そこには柳韻さんよりも一世代ほど歳をとった老人がいた。そして彼女も
「こんにちは。柳韻さんに言われてきました。」
そう言うとご老人は自己紹介をしてくれた。
「儂は、次郎だ。お前さんのことは柳韻から聞いている。これから剣術を教えてやる。好きに呼べ」
「では、先生と」
「構わん」

そう言って先生はその日から俺に指南してくれた。そのあと知ったのだが、先生は刀の鍛治師でもあるらしく、刀鍛治についても教わることとなった。彼女は先生の孫だった

共に過ごした日々は何ものにも代え難いモノだった

そうして過ごし、小学五年になり、中国人の転校生が来ていじめられていた。そのいじめていた奴らは俺に何度もちょっかいをかけてきた奴らだったからそれを口実にぶちのめした。

昔は人に手を振るうことに戸惑っていたが、先生に剣術を教えてもらっていたら、その抵抗も無くなった。

先生曰く、剣道はポイントを取れる動きが良いとされているスポーツであり、剣術は理に適う動きと瞬転を見極めることを目的とした殺人術である。

故に強さを求めた俺はその戸惑いを捨てた。

ある日、自分と一緒にいたせいで彼女は傷つけられた。だから有象無象を気にしなくなった

一章
第2話

あぁ最悪だ。面倒が増えてしまったな。
まぁ、どちらにしろ俺は剣を振えればそれでいい。

俺はどうやらＩＳを動かせるらしい。そのことが判明したのは高校受験の日だった。
あの時、正直馬鹿らしいと思うかもしれないが、俺は受験会場で迷子になってしまったのだ。

受験会場の建物は複雑でトイレに行ったあとに元の道に戻ろうとしたら全く別の廊下だった。しかも、ここは様々な公共施設が併設されてるせいで大きいのだ。いろいろと彷徨いやっと受験会場と書かれた扉を開けて奥に行くと何故かＩＳが置かれており、間違えたと思うものの、後ろから足音が聞こえ咄嗟にＩＳの後ろに隠れたのだ。
そう、体を密着させる感じでだ。すると目の前が真っ白になり気づくと視線がいつもより高く、何やら体に違和感を覚えたのだ。まるで鎧を着ているような感じだ。

もうわかっただろうけど、俺はＩＳを装着していたのだ。そこに先の足音の正体である、おそらくＩＳ学園の受験監督官である人が来てしまい、俺はＩＳを装着した状態で見つかったのだ。

やらかした、と思うも時すでに遅し。ＩＳの装着を解除するのに手間取っている間に沢山の人に囲まれていたのだ。

多分事情聴取やら俺の処遇やら今後のことについてまで国のもとで決まるのだろうと考え、抵抗も無意味だと思い無抵抗で連れて行かれる。

道中には流石というべきか記者たちが待ち構えておりスムーズに事は進まない。

やがて混雑する道を抜けて目的の車が見えた。

だが何を思ったのか。護送車に乗る前に逃走の意思は無いと伝えたのに後ろから無理矢理拘束されそうになったので、押さえつけてきた人を投げ飛ばし手枷などを嵌めようとした人を頭突きで沈める。

その一瞬のことに驚いて放心してる奴らを置いて護送車に向かって歩く。後ろでは黒いスーツを着た男たちが下手人を取り押さえている。

「手荒なことをしないでくれよ。逃げるつもりなんて無いんだから。」

そう言い残すと同時に護送車の後ろに乗り込む。内装はお世辞にも居心地が良いと

は言えず、頑丈ゆえの武骨さが目立っている。機能だけを求めているからだろう。
そういうのも案外悪くなく、変わっているとは思うが好ましいと思う。
そこに先ほど拘束しようとした集団とは別の武装した人たちが乗ってきた。それを確認した運転手は車を発進させる。
目的地に到着するまでには時間があるだろうと思い、他の乗ってる人たちに先ほどの集団の事を質問する。
質問に答えてくれたのは、リーダー格の人でどうやら先ほどの野蛮な集団は女性権利団体の手先らしい。俺が逃げずにそのまま国から派遣された彼らについて行くので無理矢理連れ去ろうとしたのだろうということらしい。
彼らは俺を無事に護送するために派遣された特殊部隊らしい。彼らは先ほどのような妨害が予想されたため護衛として守ろうということだったが、俺が自己防衛をしてしまったために意味が無かったなと笑われてしまった。

その後、俺は国の偉い人やらヒステリックな女と喋らされて疲れた。
特に女は色々としんどかった。通されたのは目に毒となるほどの派手な装飾を施された家具たちに、高級な素材をたっぷりと使ったソファや絨毯といった慎ましさのない悪趣味な部屋だった。

そこで何故ＩＳを動かせるのかという事やその場にいた理由をウザいと思うほどしつこく聞かれた。だがそれ以上に質問の答えを否定された挙句に、人格否定ととれる暴言や女性の素晴らしさという意味不明な事を目の前で叫ばれるのを聞かないといけないのだ。

なんか終わりそうになかったから、とりあえず相手の意識を飛ばして静かにさせる。するとそれを見計らったように黒いスーツを来た人がぞろぞろと部屋に入りその女を回収して、俺はホテルのスイートルームに通された。

その次の日に昨日話した偉い人が来て

「君にはＩＳ学園に入学してもらうことになった。気の毒だが拒否権はない」

と言われてＩＳの分厚い参考書を渡された。それと担当の人に言えば欲しいものは用意してくれると言われたので、勉強道具とか参考書以外のＩＳの資料を持ってきてもらった。その中に何故か各国の現在開発中のＩＳの資料が混じってたのには驚いた。

なんかいろいろとやばそうなので俺の担当の人に全部覚えてからそっとお返ししといた。

とりあえず時間はあるので一年の部分を全部予習して、二、三年のもちょこっと勉強しといた。

ほとんど不満はなかったが、鍛錬を部屋の中で出来る物しかやれなかったのでそれが

不満だった。だから、素振りの為の刀を要求すると何故か用意してくれた。
後日、先生に話すとどうやら先生が根回ししてくれたらしい。

そしてスーツを着た職業不明の姉に連れられＩＳ学園に来た、その時に姉はＩＳ学園で教師をしていると知った。
学園に来たのは、どうやらＩＳを使った試験をやる為らしい。ダメ元で１時間だけ動かさしてくれと頼むと三十分だけならとＯＫが出た。
どうやら他の受験生も十数分だけ練習時間が与えられるようで、俺の場合はＩＳに触れて間もないという事で三十分らしい。
練習の前に機体を選ぶらしく俺は刀の使える打鉄を選んだ。それから練習し始めてまずは何事も基本が大事と思い、ＩＳで走り込みやら素振りをした。飛行の練習もしたが、違和感を感じたまま終えてしまった。

「それではよろしくお願いしますね。織斑くん」
「ええ。こちらこそ」
その後試験では山田真耶という先生と戦った。何やら最初は慌てていたが、少し待つと落ち着いたようだ。

それからは真剣に戦った。山田先生は最初の慌てぶりが嘘の様に獰猛な目をしていた。

山田先生は射撃が主体の戦い方らしく、開幕早々に突撃銃で精密射撃をしてきた。

俺はそれを飛ぶというよりは地面を蹴る感覚で横に避ける。その後も追撃が来るがどうしても命中してしまう弾は切り、基本は避けを意識して戦う。これには、一流のＩＳ操縦者の山田先生も面食らったようだ。

「まさか銃弾を叩き斬るなんて！」

「驚く暇はないですよ？」

「百も承知です！」

しかし、山田先生は驚きながらも冷静に間合いを取り続ける。試合開始から五分ほど。どちらも無傷だ。そしてようやく山田先生の動きにも慣れてきて、戦う時の癖も分かってきた。

山田先生は射撃で牽制して、相手を罠に追い込み殲滅することを狙っており、試しに近接攻撃すると今度は罠に誘い込むように立ち回る。

だから、そこを突くしかない。

俺はＩＳ用の刀〈葵〉を二本両手に持ち、スラスターへの供給エネルギーを減らす。

そして、山田先生に近づく為に地を走り近づき、銃弾を跳んで回避し、スラスターを

一瞬吹かすことでアリーナ中を縦横無尽に駆け回るり、普通では考えられない無茶苦茶な動きをする。

移動にスラスターを使わず、パワーアシストで戦う俺に山田先生は驚きながら対処するが予想外な動きに決定的な隙ができる。

「そんな、デタラメな!?」

「残念ながら、こっちのほうが馴染むんですよ!」

そのまま相手の懐に飛び込んで銃を切り裂き、スラスターを一刀両断。そして、わざと投げられたグレネードを破裂させて煙に紛れる。この煙幕で、山田先生から見た俺は、完璧に策にはまったと確信しているのだろう。

その場に留まる俺に、大きな杭のような武器〈パイルバンカー〉を装備した山田先生が真上から現れて俺に一撃必殺の攻撃を浴びせようとしてくる。だが俺は近づいてくる山田先生に左手の葵を投げつけて、怯ませる。

「なっ!?」

そして、投げつけると同時に近づき怯んだところに空を蹴って必殺の居合を食らわして吹き飛ばす。山田先生は何にやられたかも分からないだろう。

試合は俺の勝利で終わった。そもそも何故俺が山田先生の動きに完璧に対処できたか。それはその動き自体を予測していたからだ。多分予想してなくても対処出来ただ

ろうが、それだと相当にキツかっただろう。

元々、山田先生は近接攻撃の時にわざと隙をつくっていた。それは罠であると同時にチャンスでもある。だから、山田先生の罠に罠を敷いたわけだ。

「ＩＳを使った戦いも面白いな」

その後は、ホテルに帰って入学式まで大人しくすることになった。

第3話

はぁ、どうして面倒なことはこうもやってくるのだろうか。

あのホテル生活も終わりを迎えた。なぜなら今日はＩＳ学園の入学式だからだ。しかし、全校生徒の中で唯一の男子生徒というのは、なかなかキツイものだ。

だが、混乱を避ける為か俺は別室で待機だった。

そんな気苦労はさておき、入学式も終わり、俺は一年一組の生徒になったらしく、自分のクラスに向かう。教室に着いたときに自分の席を確認したところで名簿に篠ノ之箒という文字を見つけてしまった。最悪だなと思うもののどうしようもないので確実にこの一年間は苦痛を我慢をしなければならなくなった。

そして、自分の席に着くと先ほどから感じる数多の視線にうんざりしていた為、スマホにイヤホンを刺して音楽を聴きながら、読書をする。こうすると周囲の雑音も聞こえなくなり、本に集中する事で自分だけの世界を感じれる。

この本を読む習慣は先生の所に通い始めてからついた。それは先生に勉強だけじゃなく本を読むことも勧められたからだ。

本を読むことで様々な知識を取り入れることも出来るし、昔の日本の書物なら昔の強い心の在り方や武士道についても深く知れるだろうと言われたからだ。

一応、剣を使う身であるため武士道のことを知っておいて損は無いだろうし、強い力には強い心が伴わなければならないと先生もおっしゃっていた。

そういう日常生活で自分を高めることが強さへの研鑽になるのだろう。俺は強くなるための努力を惜しむことは決して無い。

ふと、気がつくと教室の扉が開き試験の時に会った山田先生が入ってくる。彼女が担任なのだろうか?その疑問も彼女の自己紹介で明かしてくれるだろう。そう思っていると山田先生は教壇に立って口を開く。

「これから一年間このクラスの副担任を務める山田真耶です。皆さんよろしくお願いしますね」

「よろしくお願いします」

おかしいな、山田先生の自己紹介で返事をしたのが俺だけとか。ずっと視線を感じるから多分みんな俺に注目してるからだろうけど、こういう挨拶をされたら挨拶を返すというような礼儀を欠かすのはいただけない。そんな事と思うかもしれないが、俺はそういうのを人として大事にするべきだと思う。

そんな事はさておき返事が俺だけだったからか、山田先生は不機嫌なようだ。
「はぁ、まぁいいです。出席番号一番の人から前で自己紹介を」
そうしてみんな自己紹介をしていく。俺は苗字順の為結構前だ。なのですぐに順番がまわってきた。
「次、織斑一夏君です」
「はい」
山田先生は俺には態度が柔らかい気がする。やっぱり礼儀は大事だな。
「織斑一夏と言います。趣味は鍛錬と読書。特技は武術や家事などです。朝や夕方に鍛錬してる姿を見ても話しかけないでもらえるとありがたいです。」
そう言って軽く礼をした後に自分の席に戻ろうとすると、背後から攻撃された為振り向きながら裏拳の要領で振り下ろされた出席簿を受け流す。
これには姉も驚いたようで面食らうがすぐに表情を取り作り要件を言う。後ろでは女子が姉の登場に騒いでいる。
「馬鹿者。自己紹介で印象に悪いことを言うな」
「別に個人の勝手でしょう?織斑先生。俺は事前に重要な要件を伝えたまでです」
「ふん。まぁいいだろう」
そんなやり取りを見て勘のいいクラスメイトたちはコソコソと話しているようだ。

「織斑君と織斑先生って兄弟なのかな？」
「そうなんじゃない。苗字一緒だし、面識もあるっぽいし」
「じゃあ、ＩＳを動かせるのも関係あるのかな？」
色々と話し声が聞こえるがそのまま姉の前から自分の席まで移動する。席に座ってもまだ煩いままなので咳払いをしたあとに姉は演説のように話し始める。
「これから一年間お前たちの担任を務めることになった織斑千冬だ。まだまだＩＳについて理解していないひよっこ以下の君たちをとりあえず一人前程度にすることが私の務めだ。私の言うことにはきっちりと返事をしろ、いいな？」
最後の方には威圧をかけており、騒がしかった女子もはいと返事をしている。

その後、自己紹介も終わり授業前の休み時間になった。そして、面倒なことに篠ノ之箒がこちらに来ようとしているがそれに気づかないふりをして、本を読もうとすると別のクラスメイトに話しかけられた。
「ねぇねぇおりむー、久しぶりだねぇ」
そう言って隣の席からこちらの席の横に来た、独特な渾名で俺に話しかけて来たのは布仏本音だ。彼女は先生の所で鍛錬をしていた時に尋ねて来た女の子の付き人だった。だから面識があるのだ。

「あぁ、久しぶりだなのほほんさん。ＩＳ学園に来てたんだな。てことは簪もか。簪は元気にしてるか？」
「うん、かんちゃんも元気だよぉ。かんちゃんは四組なんだぁ。放課後にでも会ってあげてねぇ」
「一夏！そいつは誰だ！」
　本音と話していると箒が割り込んできた。昔と変わっていない。一塁の希望も消え失せたようだ。とりあえず無視はさらに面倒を呼ぶ事になるので返事を返す。
「彼女とは友達だよ、篠ノ之。いきなり話に割り込まないでくれるか」
「そんなことはどうでもいい、話がある。付いて来い」
　そう言って無理矢理連れていこうと俺の腕を引っ張るが勿論俺は抵抗して、篠ノ之は手を離す。
「篠ノ之。言っとくが俺はお前のことは嫌いだ。関わらないでくれるか」
「なんだと！」
　そう言うと怒りだすが無視を決め込んで本音に言う。
「そろそろ予鈴が鳴る。席に着いた方がいいぞ、のほほんさん」
「そうだね。ありがとねぇおりむー」
　そう言って彼女は席に着く。すると予鈴はなるが篠ノ之は気づいてないようだ。つ

まり姉に叱られるということだ。

「さっさと席につけ！篠ノ之」

　そうして始まったのは山田先生の座学だ。俺は一年の範囲の予習は終わっているので、余裕をもっているため山田先生が所々言う教科書に載っていない知識をメモしたりする。すると一旦山田先生は授業を止めて、みんなに質問する。

「ここまでで、分からない人はいませんか？織斑君は大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です。お気遣い感謝します。山田先生」

「よかったです。皆さんも、もし分からない所があったら放課後にでも聞きに来てください。分からないままが一番ダメですからね」

　多分、山田先生はＩＳを勉強し始めて間もないから気を使ってくれたのだろう。彼女の行動は一つ一つ生徒を気遣ってるのが分かる。いい先生だ。

　そうして、この授業は終わった。

第４話

あぁ、ちょうどいい。俺もやりたかったんだよ。
まだまだ戦い足りなかったからな。

山田先生の授業も終わり、肩が凝ったので軽く腕を回すと関節がポキポキとなる。
少ししてから、また本音と話そうと思ったが、本音を見るとクラスの女子と談笑していたため、本を読もうとするとこちらに向かってくる足音が聞こえた。また、篠ノ之かと思ったがどうやら違うかったらしい。
「ちょっとよろしくて？」
そう声をかけてきたのは金髪で白人系の人種の女だった。その口調とあからさまに見下している感じの態度だったので、おそらく女尊男卑に影響されてるのだろう。
めんどくさそうだが、とりあえず返事を返す。
「ああ、別に構わない」
そう返すと不機嫌な顔をしながら話しかけてくる。
「まぁ！なんですのそのお返事は？私に話しかけられるだけで光栄なのですから、それ

相応な態度があるのではなくって？」

やはり面倒になった。この手の輩には下手にはならない方がいい。偶にそういうのは適当に受け流すほうが良いという奴がいるが、一度でも下手になるとつけあがって余計にめんどくさいのだ。

「あっそ、すまないが俺はお前の事など知らないんだ。聞いたこともないくらいにな。生憎だけど俺は知らない相手に敬意を持てるような人間じゃないんでね」

「私を知らない？このセシリア・オルコットを？選ばれたイギリスの国家代表候補生にして、入試主席のこの私を？」

そんなに自信があり、国家代表の候補生に過ぎないのに選ばれたと豪語するあたり、おそらく専用機を与えられているのだろう。巧いこと誘導できれば楽しいことになるだろう。だからそのプライドを煽る。

「なるほどな。入試主席ということは実技試験で教師相手に勝ったってことだな。もちろん訓練機で。まさか専用機でやったとは言わないよな、機体性能が断然違うのに。それで主席を自慢するならたかが知れるな」

そういうと顔を真っ赤にして怒鳴る。どうやら図星のようだ。

「黙りなさい！男風情が私を馬鹿にして。貴方なんてどうせすぐにやられたのでしょう？」

「図星だからと喚くな。それと俺は試験官に訓練機で勝ったぞ。信じられないなら、織斑先生と山田先生に聞きに行くと良い。あの二人は知っているからな」

そう返すと信じられないと言いながら自分の席に戻っていく。おそらくあのショックの後にプライドを傷つけられたことでＩＳで戦いを挑んでくるなりしてくれるだろう。

「ああ、もうすぐ授業が始まるな。」

結局時間がなくて本は読めなかった。

授業が始まった。今回は姉が担当するらしい。

だが、授業の前になにかあるらしい。

「授業を始める前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないとならないな」

そういって姉は代表者について説明し始めた。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席する役、まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点で大した差は無いが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更は無いからそのつもりでな」

そういってから姉は一度俺の方を一瞥して続きを話す。
「さて、代表者は誰がなるか決める。自薦でも他薦でも構わない、誰かいるか？」
そこで俺は気づいた。俺は物珍しさで推薦されても可笑しくないということにだ。
案の定、女子は俺に投票しようとしているのか。沢山の手が上がる。
「はい！織斑君がいいと思います」
「私も織斑君に」
「私も～」
そんな感じで俺に投票が集まる。そこで姉は俺にも話を投げる。
「このままだと織斑がクラス代表だが何かあるか？」
「俺は鍛錬の時間を潰さないようにしてくれるなら構いませんが、もし鍛錬の時間が減るなら何かしら対策を、それもないならお断りします」
「ダメだ。推薦されたものには拒否権はない」
理解した、姉は俺をクラス代表にさせる気だ。まぁ鍛錬の時間は事前に話を通してるので問題はないが、そろそろオルコットが暴走でもするかな。
「待ってください！納得がいきませんわ！」
やはり予想通りのようだ。そっとボタンを押す。
「そのような選出は認められません！　大体、男がクラス代表だなんていい恥晒しです

わ！　私に、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか」
「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！　わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ」
　イラつく言葉ばかりを並べるオルコットにクラスメイトは青筋を立てており、山田先生や姉もイラついてるようだ。それにクラスの殆どは日本人であり、ここまで言ったんなら、この先彼女にクラスの居場所は無いだろう。それでもまだ言葉を続けるオルコット。
「いいですか!?　クラス代表は実力トップがなるべきであり、そしてそれはわたくしですわ」
「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛であるのです」
　そろそろ潮時か、そう思いボタンをもう一度押してからオルコットの言葉を遮るように喋る。
「そろそろ止めとけよ。手遅れだろうけどな」
「なんですって、下等な男風情が私に指図するのですか。馬鹿にされてるというのに怒

らないとはプライドの欠片も無いようですね」
「いいや?そんなつもりはない。別に俺がお前に馬鹿にされても雑魚がほざいてるに過ぎないからな。だけど、言わせてもらうならお前はさっさと愛しのイギリスに帰るといい。俺たち日本人を見下していて、文化としても後進的なんだろ?それならこんな苦痛な所に留まる必要はないだろう?」
「何を言っているのですか?私は国の指示でここに来たのですわ」
「なら担当官に言って帰国させてもらえよ。そしたら代わりの代表候補生が来るだけだ。つまり俺たちも新しい転校生が常識人ならｈａｐｐｙってことになる」
「私を馬鹿にするのですか?」
　ここまで言うとオルコットは怒りを見せて噛み付いてくるが俺は彼女の言ったことから提案しているだけだ。本当の馬鹿は無闇矢鱈に人を馬鹿にするお前だよ、オルコット。
「何を怒るんだ。俺はお前の言ったことを返しているだけだ。そもそもクラス代表になりたかったんなら、自薦すればいいだけなのに人を馬鹿にした結果、ここにお前の居場所は無いぞオルコット」
　そういうと俺は織斑先生に話を振る。
「どうやら彼女は自薦するようですが、快く思ってない人もいるでしょうからここは勝

負で決めるのはどうでしょう?」
「…そうだな。これから一週間後にクラス代表を決める為の試合をする。日程は来週の月曜日の放課後に第三アリーナだ。その試合結果で代表を決定する。異論は認めん。少々時間がかかったが授業を始める。」
　そういってこの話は終わった。さてオルコット、お前は俺の強さの糧になってくれるかどうか楽しみだ。
　簡単に潰れないでくれよ…

第5話

最悪なこともいい結果になる。人生はよくわからんな。

放課後になった。教室は閑散としており今は俺一人だ。
何故、一人教室で黄昏ているか。それは山田先生に寮部屋の鍵を渡すから待っといてくれと言われたからだ。
本当なら本音と一緒に簪に会いに行こうと思ったのだが、下手に歩き回られると見つけるのに時間と労力がかかるからしい。

だから教室で待つのだが暇だったから音楽をかけて、窓際の机に腰掛けている。手持ちの本は読み切ってしまったから外の景色を眺めている。夕日が眩しいな
もう一時間経つなぁ、と俺は腕時計を確認する。やっぱり暇な時は音楽を聴くのに限ると思いながら待つ。あと、五分経っても来なかったら、頑張って職員室を探そうと考えていると話しかけられる。
「ね、ねぇ！一夏君、久しぶり」

「ん？あぁ簪か、久しぶりだな。どうしたんだ？」
　話しかけてきた彼女は更識簪といい、青い髪に赤い目と特徴的な容姿に眼鏡をかけており、何処か儚さを感じる少女だ。
　如何して簪が此処に来たのか、そう問うと彼女は手に持っていた鍵を掲げて見せる。どうやら彼女が持ってきてくれたらしい。如何してかは分からないが礼を言っておく。
「ありがとうな、簪。一つ聞くが如何して簪が持ってきてくれたんだ？」
「職員室に書類を提出しに行った時に、山田先生に捕まって、急ぎの用事が入ったから代わりに渡してと」
　そうだったのか。山田先生も手が離せなかったから時間が遅くなったんだな。
「三十分前に言われたの」
「え？」
「あっ……んーとね。一夏君の居る場所を聞くの忘れちゃって、そのまま山田先生は何処かに行っちゃったから。途中で本音に聞いてから分かったの。ごめんね」
「謝らなくていい。偶然の結果なんだから、俺は気にしていないよ」
　結果がどうあれ、感謝をしなければ。しかし、山田先生も大変だな。やっぱり俺の入学も関係してるのだろう。
　とりあえず、寮に行くか。

「簪、俺は部屋に行って荷解きするが、お前も一緒に行くか？」
「うん。そうする」
簪も同行することになり、駄弁りながら歩く。そこでふと気になった事を質問する。
「なぁ、俺の部屋って一人部屋だよな？」
「分からない。でも、調整できてなくて相部屋も有り得る」
「まじか、気をつけないとな。簪のペアは？」
「いないよ。候補生だけど家の事もあるからね。本音は人数の都合で別の部屋、言っても隣だけど。お姉ちゃんが融通を利かしてくれたみたい」
「でも、簪と違う部屋ってことは別にも一人部屋になる事情がある生徒だよな」
そう言って嫌な感じがした。まさかなと思いその考えを頭の隅に追いやる。
「ん、着いたよ。一夏君」
「そうだな。後で一緒に夕食を食べよう」
簪はその話を承諾し、自分の部屋に向かった。

俺も部屋に入ろうとするがその前に何度かノックをするが返事は無い。出かけているのだろう。そう思い部屋に入りベッドに置かれた荷物を確認する。部屋には浴室があり、台所もあり、ベッドは二つ、あとは様々な家具だ。

すると浴室の扉が開き、バスタオルを巻いた篠ノ之と目が合う。
瞬間篠ノ之は近くに立てかけていた木刀で飛びかかってきた。俺はその攻撃を躱しながら荷物に被害が無いように玄関の方に移動する。
十分に荷物から離れたのを確認すると次の篠ノ之の突きを躱しながら柄を掴み、こちらに引き寄せてから無防備な腹に膝蹴りを決める。突きを放った木刀は玄関の扉を貫通して刺さっている。
俺の容赦ない一撃を食らった篠ノ之は木刀を手放し、膝をついて痛みに呻いている。しばらくは動けないだろう。俺はこんな奴と居られるかと思い、まだ広げていなかった荷物を纏めて持って、ドアノブに手を掛ける。
後ろから呼び止める声が聞こえるが無視してドアノブを回して部屋を出る。そして悪いとは思うが簪の部屋に向かう。廊下ですれ違う生徒たちは俺が荷物を持っているのを不思議そうに見ている。

簪の部屋に着くとノックする。少しして制服姿の簪が出てくる。沢山の荷物を持って訪れた俺を見て驚いたようだが部屋に入ってと言って通してくれた。
荷物は使ってない廊下側のベッドに置いてと言われ有難く置かして貰うと、お茶淹れるから座ってといわれ椅子に座る。

少しすると簪は台所から湯気の立つ湯呑をお盆に乗せて持ってきて、向かいの席に座る。お茶を飲んで一息つくと簪が何があったのと？質問してきたので状況を説明する。
「部屋の相手が篠ノ之だったから、荷物持って出てきたんだ。俺と篠ノ之は知り合いなんだが、俺は彼奴のことが昔から嫌いなんだ」
「そう、それで何があったのか詳しく教えて？」
「まず、簪と別れた後にノックをして誰も居ないことを確認し部屋に入って荷物を確認してたんだ。そこで浴室から篠ノ之が出てきてな。木刀で切りかかってきたんだ。それを対処してから部屋を出たんだが、行く当てが此処しかなかったんだ」
状況を知って、なるほどと呟いてから少し考えてる簪を見て、お茶を飲むことにした。美味いな。やがて、頭の整理が終わった簪は話し始める。
「状況は分かった。でも、部屋割りを変えるには時間が掛かると思うのだけど、その間はどうするの？」
「荷物を此処に置かせて貰えたらと思ってる。寝るのは簪が嫌だろうから野宿か、適当な空き教室に行くよ。」
「別にいいよ」
ぼそっと何かを言う簪にもう一度尋ねる。
「何て言ったんだ？」

すると少し怒鳴るような口調で言う。
「別にこの部屋に住んでいいと言ってるの！」
「え、ああ。でも悪いよ、簪も女の子だし色々と気をつけないといけなくなるだろ？」
「私がいいといったの！恥ずかしいこと言わせないでよ。それに野宿とかじゃ体が休まらないからダメ」
そういってこの話は終わりだと顔を赤く染めてそっぽを向く簪。とりあえず話を変える。
「すまないな。それじゃあ、俺は寮監にでも話をしてくるよ。ところで此処の寮監は誰なんだ？」
「織斑先生だよ」
軽く不安になっているとノックの音が聞こえ、簪が返事をしながら玄関に向かい扉を開ける。そこには姉と山田先生がいた。姉と目が合い、姉は口を開く。
「悪いな更識。私たちは織斑に用があってな。すまないが入れてもらえるか？」
「ええ、いいですよ。一夏君も話があるそうなんで」
そういうと簪は二人を中に入れてお茶を淹れてきますねといって離れていくが、その時此方に振り向いて笑っているのが見えた。簪め、覚えてろよ
俺の目の前に来た姉は口を開く。

「どういうことだ一夏？政府と学園上層部からの指示の事でお前に話をしようと思い部屋に行くと扉から木刀が生えていて篠ノ之が部屋で泣いていたのだが」
「その事についてと部屋替えを頼もうと思っていたんです」
そういってことのあらましを話す。すると姉は額を抑えてため息をつき、山田先生はそうだったんですねと苦笑いを浮かべる。簪はいつの間にか戻っており、二人に湯呑を渡している。そして、姉は俺に質問する。
「もう篠ノ之と相部屋になる気は無いのか？」
「そんなの元からありませんね」
そういうと姉は苦虫を潰した顔をする。

この時もこれからも一夏は知らないが実は千冬が箒と相部屋になるように調整したのだ。なぜなら、箒はいままで政府の指示で転校を繰り返し、友達もおらず気性も荒い。それに重要性が高いので一人部屋だったのだが、一夏なら大丈夫だろうと思い組み入れて、一夏を介して周囲に馴染ませようとしたのだ。

その結果は無残なものだったが。千冬は話を変えて部屋替えのことについて話す。
「部屋替えのことだが部屋数の関係上一人部屋は無理なのだ。それに政府の方から更識

と相部屋にしろと言われてな。更識は構わないか？」
「はい、構いませんよ。先ほど一夏君とも話し合って言いましたし」
　その言葉で姉は此方を睨んできて、簪はまた口元が笑っている。さっきの仕返しに俺も言い返す。
「ですが、実はその話は簪から言ってきたんですよね」
　そういうと山田先生がえっ！と顔を赤くして驚き、にやりと笑う姉と一緒に簪に話を振る。
「更識さん、大胆ですね！」
「まさか、大人しそうな更識がな。意外だったな」
「ち、違いますそんな意味じゃないです」
　簪は羞恥心で顔を赤くしこちらを睨む。とりあえず話を終わらせるように話をする。
「てことで、俺はここで生活するんだな？織斑先生」
「そういうことになるな。だが、まだ学生だからな。避妊はしろよ」
「そんなことはしませんよ。まだ付き合ってもいないのに」
　そういうと、姉はほぉと呟く。その後ろで山田先生と簪が騒いでいる。
「なるほど。付き合えば、か。更識と何処で知り合ったのか知らんが好意は持ってるんだな？よかったな更識、此奴はお前のことが好きらしいぞ。さて、私と山田先生は仕事

が残っているからな。行きましょう、山田君」
　そういって姉は山田先生を連れて逃げる。部屋を出る前に山田先生が振り向く。
「忘れていましたが、織斑君は大浴場を使えませんからね～」
「分かりました。」

　さて、先生たちは部屋を出ていったから、さっきから静かな簪に話しかけようとすると、簪は頬を赤くしてブツブツと何かを呟いてる。

「付き合うって恋人だよね。それに避妊って行為の事でしょ。一夏は私のことが好きだし私もだしこれって相思相愛なんじゃ？でも、いつもはそんな素振り無いのに。いや、一夏は感情をあまり出さないだけで、もしかしたらもあり得るんじゃないかな。え、どうしよ、それに…」
「おーい、簪。大丈夫か？」
「え、あ、一夏！どうしたの？」
　とりあえず話しかけたけど慌てぶりが半端じゃない。まぁ教師としてはいろいろとヤバい発言だったしな。
「ひとまず飯食いに行こうぜ」

「あ、うん。そうだね、お腹減ったもんね」

そういって飯を食べに行ったのだが、その間もずっと顔は赤いままだった。

はじめての…

初めて人を殺したんだ
あの時、この世に生を享けてもっとも自分を感じることができた

己が殺めた命で
その感触、その罪悪感、その喜び、その悲しみ(哀しみ)。
全てが愛おしかった

自分の罪が、汚れた自分が、この身に受ける憎しみが。
俺を強くする。

その日、俺が俺(原作)と決定的に道を違えた。
その時が訪れたのは突然だった。次郎もとい先生と出会い、教えを受け始めてから四年が経った夏の日、先生が俺の仕事を見せてやると言い出したからだ。
先生の仕事、それは先生が数日だったり数週間ほどたびたび出かけるのだ、刀を持っ

て。前にその事について聞いたことがあったが答えてはもらえなかった。しかし、先生はこう仰られた。

「お前にはまだ覚悟が足りん。いや、余計なものを捨て切れておらん。故にお前はその境界を彷徨っている。それでは駄目だ」

そう難しいことを言う先生に俺は尋ねたんだ。

「その境界とは？」

「お前が彷徨うもの、それはかつての理想の残骸だ。前に言っていたな？みんなを守りたいと思っていたと。だが、今はただ強さを求めている。それは何故か？」

先生から目を逸らさない。逸らしたら最後、俺は永遠に半端者に成り下がるからだ。

「答えてやろう。お前は欲しているのだよ、自分の命よりも大事にしたい『もの』をな。しかし、まだそれを見つけておらぬお前はできる限り周りを傷つけないようにする。それはお前の強さには不要だ」

「それは俺にその『もの』を、探し求めることを諦めろと言ってるのでしょうか？」

間髪入れずにそう問い返す。いつもより口調が荒くなる。そんな俺を先生は手で制し続きを言う。

「情を全て捨てろとは言っておらん。ただお前が強くなった先にそれは見つかるだろ

う。だから、人が傷つくのを恐れ逃げてはならん。そうして見つけたとしても所詮は偽物だ。お前が見つけ相手が求める、それがお前の『本物』になる」

そう言われてから俺はただ強くなった。強くなり続けた。そして、不要な願いは消えて、求める姿への覚悟を手にした。

だから先生は見せるのだろう、俺が歩くであろうその道を。

そして先生は日がまだ昇っていない早朝に起きて刀を持って来いという。それに従い先生に授けられた刀〈花簪〉を手に先生の屋敷に向かうと黒塗りの車が屋敷のある山の麓に停められており、先生はそれに乗っており俺も乗り込むと車は進みだした。

それから出発した車は三十分ほど走り、停まったのは大きな和風の屋敷だ。先生は車から降りると屋敷の玄関を潜り広い屋敷の中を迷わず進む。

そして、辿り着いたのは威圧感を感じる部屋の前。先生は襖を開けると部屋の中央に座る男性に話しかける。先生がその人の前を座ったので俺はその少し後ろに座る。

「来たぞ楯無、此奴が儂の弟子だ。名は織斑一夏だ。今まで見てきた者たちの中で最も才能があり、最も強くなる。お主や儂よりもな」

どうやら目の前の男性は楯無というらしい。髪は黒いが、瞳は紅いという変わった容

姿だ。その瞳を俺は見たことがある。
「ほう。貴方がそういうなら確かなんでしょう。ですが彼はまだ簪や■様と同じ中学二年でしょう？」
「そうだ。だが問題はあるまい。実力を見せれば皆も大人しくなるだろう」
　そこで気になった事を聞く。
「簪ですか、では貴方が彼女の父親ですか？」
「そうだ。私の名は更識楯無だ」
　俺が楯無さんの娘である簪と出会ったのは中学一年の時だ。彼女は先生が作った薙刀を受け取りに従者の布仏本音を連れてやってきたのだ。そのときに知り合い、その後も彼女とは何度か顔を合わせて手合わせをした。
「そうか、君が簪の言っていた強い少年か。なるほど、薙刀を使う簪は姉の刀奈を凌ぐというのにな。どうだ強かったろう？」
「ええ。とても楽しかったです」
　そう答えると楯無さんは苦笑いする。
　簪は出会ったときは姉にコンプレックスを抱き苦しんでいた。その時に、俺と新調した薙刀〈初桜〉で試合を行ったのだが彼女は当時の俺に喰いつける程の実力者であった。それは姉を越える為に得意な薙刀を鍛えていたらしいが、いつの間にか姉を越えていた

らしい。それ以来は一応憑き物が落ちたようになったらしい。
　それで、と楯無さんは話を戻す。
「一夏君、君が此処に来てもらった理由を言おうか。次郎、私から言いますね」
　そういい先生に確認をとると楯無さんは話し始めた。
「私たち更識家は日本政府直属の対暗部用暗部組織であり、私はその長を務めている。君の先生である次郎は先代のころから更識家に関わりがあり、暗殺者として活躍していたんだ。それに彼は今は引退しているが更識家の構成員を指導もしていた。もちろん私もその中の一人だ。その次郎が逸材と呼ぶ君を我々は更識に迎え入れたいんだ。」
　そういわれた俺は途惑う、如何したものかと。そこで先生が口を開く。
「一夏、この仕事は人を傷つけ、命を奪うことも日常茶飯事だ。だがもう言ったはずだぞ。覚悟があるなら悩む必要などないだろう?」
　その言葉を聞き、俺は決意を固めて返事を返す。
「その話、お受けします。楯無さん」
「よく言ってくれた。では、さっそく君の任務内容を説明しよう」
　そういって話を進める楯無さん。用意周到だな。
「おそらく君には次郎と共に暗殺と殲滅任務を頼むだろう。その他にも諜報任務などもこなしてもらうだろうがな。そして次に、君には転校してもらわなければならない」

「どういうことですか？」
「それは■様の護衛をしてもらう為だ。無論、根回ししておくから学費も君の姉についても心配しないでくれ。」
「■にこの話は？」
「してある。君になら任せられるらしいよ」
「そうですか、分かりました。では、いつ転校を？」
「再来週の月曜日からだ。暗殺の任務は明日の夜からだ。それでは皆に紹介と行こうか」
　そういって楯無さんは立ち上がり部屋を出て行く。その後ろに先生と俺がついていく。隣を歩く先生は普段は出さない優しい声で俺に言い聞かせる。
「一夏、これから先、お前は人を殺め、手を汚すことになるだろうがそれがお前の望む道だ。後悔のないように生きろ」
　それっきり口を開かない先生と並んで歩いていくと楯無さんは離れの武道場に行き、その戸を開けて中に入り、俺たちもそれに続く。
　武道場には沢山の人が壁を覆うように座っており、真ん中はひらけている。楯無さんは中央に来るように言い、先生は入口に立ったままだ。そして、楯無さんは座っている人たちに向かって声を出す。

「これより、織斑一夏の実力を確かめる為に試合を行う。なお対戦者は反対派の代表が相手をする。事前に決めた者が前に出てこい」

そういうと俺から距離を取る楯無さん。目の前に出てきた相手は屈強な体を持ち、観察するとなかなかの手練れだと窺える。

「では、試合について説明する。ルールは相手を殺さない事、再起不能の傷を負わせない事で勝敗は相手が降参又は戦闘を継続できないと判断した場合だ。では、試合…」

「開始!」

「せやぁっ!」

楯無さんの言葉とともに振り下ろされる刀を躱し、バックステップで距離を取り姿勢を整える。相手は次の攻撃の構えをしながら近づいてくる。

その上段からの攻撃を受けるように見せかけて受け流す。

その隙をついて右足で腹に蹴りを決めると相手は吹き飛び距離が離れる。

「この、ちょこまかと動き回りおって…!」

「それが自分のスタイルですから」

それにしても流石は更識というべきか。あの一撃に無理やり刀を滑り込ませてダメージを抑えるとは。だから、次の手はそんな小手先の技で防げない様に攻撃をしようと苛烈な攻めに転じる。

敵が立ち上がった所で身を低くして相手に近づき、視覚出来ないほどの速さで抜刀し相手に連撃を与えるが致命傷となる箇所は的確に防がれる。
「なんと早いこと…。だが、好きなようにさせてなるものか！」
そこで相手の反撃をわざと許し、剛腕の一撃を刀で受けながら後ろに跳ぶ。すると相手は体勢を崩した。
着地するとそこに花簪を投げつけてそのあとを追いかける。
「なんだと!?」
カン、と驚きを隠せぬまま反射で花簪を弾いてしまう。その隙を見逃さず、その無防備な体に飛び掛かる。鳩尾に拳の重い一撃を与え弱った所で、刀を持つ手を捻り武器を捨てさせ、そのまま体の軸をうまく使い投げ飛ばす要領で床に叩き付ける。相手は瞬く間に意識を失った。
そこで審判の止めが入る。
「止め！この試合織斑一夏の勝利だ。これで文句は無いな？」
楯無さんの言葉に皆、認める旨を口にする。
そして、俺は更識の正式な隊員となったのだ。

次の日、俺は更識が使っている、どこか忍者らしさを感じる洋風な黒い装束一式を

貰った。その服にはフードもついており被ると顔を隠すこともできる。どうやら制服替わりでもあるらしい。

それを着て腰に花簪を差し、短剣を腰と脚に装備する。

そして夜、先生と一緒に深夜に女性権利団体を強襲した。

此処の会長が政府に対してやり過ぎたため、抹殺するように依頼されたらしい。近頃、女性権利団体は勢力を拡大しており、行き過ぎた女尊の思考が社会問題になっている。今回はそれが関わっているそうだ。

どうやら活動資金は政府の中のメンバーが横流ししたり、企業を強請って調達しているらしく、（まぁ、その勢いも政府の中と言っても下の方で上層部にまでは入れず仕舞い）政府に社会的地位上昇の目的で上層部の女性幹部に無理やりな接触を図った為、問題視され依頼が渡されたらしい。

そのため、金は沢山あるから防衛力も確かだと思ったのだ。

しかし、警護の者は女性ばかりで装備だけが一級品だった。手応えのないことだ。

そして、初めて殺した相手は夜間巡回をしていた警備係だった。その最後は自分が背後から短剣で喉を掻き切ったのだ。その時の気持ちは様々な感情が混ざり過ぎて分からなかった。

だが、一つは分かっていた。俺は人殺しの大罪を背負うことになり、もう昔のようには戻れない。
それが悲劇かどうか分からないが俺が望んだ道だ。
後悔はない。

第7話

その仕草一つ一つがどれも愛らしいよ。
その思いを抱いたのは■にだけ
やはり俺は君に惹かれるよ、どうしようもないほどに
俺が惹かれたのは■だけ
だけど、俺は君を求めることが出来ないんだよ。
俺が求めた人は■だ
だって俺は…
俺の思いを踏み躙るな

目が覚めた。
まだ外は薄暗く日の出まで時間があるようだがすぐでも明るくなるだろう。
家では普段からこれぐらいの時間に起床して、学校の用意をしてから日課の鍛錬をしていた。なので、ＩＳ学園に来てからも毎日できるようにトレーニングルームの使用や部活動の入部についても話を通しておいたのだ。

鍛錬に行くためにベッドから出て、服を動きやすい軽装に着替え、新しい刀〈彼岸桜〉を握る。

これは先生に一人前になったからと、送られた刀だ。刀身は光を反射し、薄い紅色を思わせる色をしている。

部屋を出る前に隣のベッドを覗くと可愛らしい寝顔をした簪が眠っていた。

とりあえず起こさないように部屋を出て、しっかりと鍵を閉める。昨日のこともあったので、より心がけないといけなくなった。

寮を出てから少し歩き、自然保護区とかいう人工的に木々が植えられている場所に着いた。此処は一見すると大きな森のように見えるが中は桜などの木や花壇で色鮮やかになっており、落ち着いた雰囲気の場所になっている。ここなら寮から離れているし、静かに集中して鍛錬に取り組めるだろう。

まずは長距離走から始める。コースは森の中を円状に造られた、花壇の間や木々の間に設けられた道を走る。一周はだいたい一キロぐらいあり、それを十周走る。

二十分ほどで長距離を終わらせた俺は今度は素振りなどの刀を使った鍛錬や、ほかにも様々な武術の型稽古を行う。

それらを七時前になるまで行い、来た道を戻る。帰り道にはジョギングを行う姉と出会った。そのため挨拶をしてから、扉を頑丈な物に取り換えてくれと頼み込み別れた。

鍛錬から部屋の前に戻った。汗を掻いて気持ちが悪いのでシャワーをすることに決めた。部屋に入ると何やら簪が狼狽えているのが後姿で分かり、何か言っているのが気になったのでそっと近づいて聞いてみることにした。

「一夏くんどこぉ。なんでいないの?ようやく私に振り向いてくれたのに」

いつもの簪らしくない。多分、朝早くから鍛錬に出ていたし、寝癖のついたままなので寝起きだろう、だから混乱しているのか。

ここで悪戯してやろうと思い、暗部に勤めていた為に身に着いた気配を殺す技術を無駄に使い、後ろからそっと近づく。簪の背後を取ると肩に手を置いて、後ろから覗き込むようにして顔を合わせる。

「おはよう、簪。そんなに俺が居なくて不安だったのか?」

すると簪は俺の名前を呼びながら腰に抱きついてきた。本当に心配していたんだろう。いくら鍛錬をしていたとはいえ、突然居なくなって脅かしてしまったので申し訳ない気持ちになる。

ズキッと鋭い痛みが奔る

少しして、落ち着いた簪に何処で何をしていたかを説明したが、案の定怒られてしまった。

「それならそうと事前に言ってよ！心配したんだよ、目が覚めたら一夏君が居ないくて。もう心配して損しちゃった」

そういって頬を膨らませる簪はまるでリスのようだ。

「悪かったよ。これからはもうちょっと早く帰ってくることにする。それに心配してくれてありがとな」

「一夏君、ずるい。そんなこと言われたら怒れないよ。じゃあ、罰としてこれから朝は私の世話をして。本音は起きないし、部屋も違うからね」

そういう簪に苦笑いを浮かべながら了承する。

「分かったよ。でも、朝ご飯は時間がないから食堂でな」

そういうと簪は頷いてから髪を梳いてと言って櫛を渡してきたのでシャワーを浴びてからと言い、その後に言われた通り髪を梳いてあげた。流石に服とかは脱衣所で自分でしてもらったが一通り朝の用意を終わらせてから食堂に向かう。

昨日と違い、食堂にはちらほらと人がいた。まあ当然だろう、朝は食堂の開く時間が七時半前からで、八時十五分には食べ終わらないとショートホームルーム（SHR）に間に合わなくなる。

俺たちは食堂が開いて少ししてから着いたから、ちょうど混み始める前だったのだろう。そこまで混雑はしていなかった。

とりあえず簪に席を取ってもらい俺がご飯を受け取る。二人とも和食セットにしたため出来上がりも同じで助かった。一つ困ったのは、おばちゃんが簪の分まで量を増やそうとしたので慌てて止めた事だ。

朝ご飯を食べ終わったのは、食堂に一年生が沢山押しかけた八時前だった。それからゆっくりと教室に向かい、簪は四組なので別れて、いつも通りの読書を始めた。

朝のＳＨＲと一時間目も終わり、二時間目は山田先生のＩＳの座学だった。

途中で山田先生が授業の説明の例えに女性の下着を出したりと、少々気まずい雰囲気になったが普通に授業を受けていた。その中で興味深い話を聞いた。

「ＩＳには意識に似たようなものがあり、お互いの対話――つまり一緒に過ごした時間、

操縦時間に比例して、ＩＳ側も操縦者の特性を理解しようとします」
「それによって相互的に理解し、より性能を引き出せることになるわけです。ＩＳは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識してください」
　言ってしまえば、ＩＳは心を持つことが出来るということであり、理解し合うということは同調率を表している。つまりＩＳが俺の心に同調すればするほど、俺の体はＩＳに適応するということだろうか。

　そんなこんなで授業の終わりを告げる終鈴が鳴った。
　山田先生が教室から出て行くと俺の周りに女子が集まる。昨日の様子見は終わりを告げたようだ。
「ねえねえ織斑くんさあー」
「はいはーい、質問しつもーん！」
「今日のお昼ヒマ？放課後ヒマ？夜ヒマ？」
　そんな感じの質問攻めを受けたが適当に受け答えをしてクラスの女子たちは捌き切ることが出来たが今度は他のクラスや上級生も来たので質問を打ち切ったと伝えて難を逃れることが出来た。

しかし、根気強く粘って、姉の情報を手に入れようとしたものもいたが、いつの間にか居た姉が追い払う。ちょうど本鈴が鳴る。
「休み時間は終わりだ。散れ」
そういうと蜘蛛の子を散らすようにそれぞれの生徒は帰っていった。まさに鶴の一声だな。
「ところで織斑、お前のＩＳだが準備まで時間がかかる」
「ん？」
「予備機がない。だから、少し待て。学園というか実際にはＩＳ委員会が専用機を用意するそうだ」
「えーと、織斑先生？」
俺が途惑っていると教室中がざわめく。姉は俺の様子に何を勘違いしたのかため息混じりにつぶやいた。
「教科書六ページ。音読しろ」
「そうじゃなくて、専用機は政府の方で事前に打ち合わせで此方の要望とかを話していて更識重工の方で開発してもらっているんですが」
その言葉を聞いて姉は眉を顰めている。
「何だと？そうか、面倒な事になったな。政府の方で用意する機体はどれぐらいで届く

んだ？」
「たしか、二週間ほど後です」
「わかった。とりあえずクラス代表を決める試合には委員会で用意した機体が間に合うそうだからそちらを使え。その後で政府か委員会かどちらか好きな方を受領すればいい」
やれやれと額に手を当てる姉の姿を尻目に思考する。
おそらく、ＩＳ委員会がこんな無茶な手を打ったのは俺が日本政府に所属し、手が届かなくなるのを危惧してるんだろうな。どちらにしろ俺は更識の一員だから日本政府寄りなんだがな。

そのあとちょっとしたことはあったが姉の一声で授業が始まった。
授業が終わるとすぐにオルコットが此方に来た。
「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」
「まあ？一応勝負は見えていますけど？さすがにフェアじゃありませんものね」
「いや、普通にそのつもりだったよ、オルコット」

相変わらず澄ました顔でウザいことばかり言うので、わざと言葉を選んで言うとその顔は不快な気持ちでいっぱいになり、澄ました表情が崩れた。
「馬鹿にしていますの?ご存じないようだから教えて差し上げましょう。この私、セシリア・オルコットはイギリスの選ばれた代表候補生…つまり専用機を持っていますの」
「そう、それで?勝てると思ってるからそう言ったんだよ」
それだけいって席を離れる。簪と昼飯を食べる為に四組にまで行く。

四組の教室に着いて、近くの女子に簪の席を聞いて呼びに行く。
「迎えに来たぞ、簪。食堂に行こうか」
「わかった。けど、目立って恥ずかしいよ、一夏君」
気にするなといって、食堂に向かう。

食堂に着くと二人とも日替わり定食の鯖の塩焼き定食を頼む。
「簪、お前の分も運ぶから席を探してくれないか?」
「大丈夫。あそこで本音が席を取ってくれてるみたい。ほら、手を振ってる」
そう言って進む簪の後をついていく。
「ここあいてるよぉ、かんちゃん、おりむー」

「ありがとう、本音」
　席に座らせてもらう。そこで他の女子たちとも他愛のない話をしながら食べていると、赤色のリボンをした生徒が話しかけてくる。
　―ちなみにリボンの色は青は一年、黄色は二年、赤は三年だ―
「ねぇ。君が噂の子でしょ?」
　そう言って話しかけてくる上級生に当たり障りなく返す。
「貴方の言う噂が俺の事ならば、そうでしょう」
「代表候補生の子と勝負するって聞いたけど、ほんとなの?」
「ええ、そうですが」
　その言葉に気を良くしたのかある提案をされた。
「でも、君素人でしょ?ならさ、私が教えてあげよっか?ＩＳについて」
「結構です。しっかりと自信も能力もありますし」
「でもさ…」
　断るがなかなか引き下がらない先輩に簪が助け船を出してくれた。
「なにかあっても、私がいるので大丈夫です。こう見えても私、日本の代表候補生なので。」

「そ、そう。それなら仕方ないわね…」
ようやく帰ってくれた。助けてくれた簪に礼を言う。
「別にいいよ。それに何かあったら遠慮なく頼ってね？」

その言葉にはどんな思いが込められていたのだろうか？
俺にはそれが一つだけじゃない気がした。

もっとも純粋で、
どこまでも穢れのない、
眩しい思いが込められていたのだと思う。

第8話

強さとなんだろうか

それは純粋な力だけでは、揺らいでしまう
それは極めた技だけでは、曲がってしまう
それは純真な心だけでは、折れてしまう

故に総てを勝ち取らなければならない

その日も授業が終わり、放課後の鍛錬をする為に教室を出よう席を立つ。
すると、竹刀袋を背負った篠ノ之がずかずかと歩いてきて、怒鳴り気味に話しかけてきた。
「一夏、道場に来い！剣の腕が鈍っていないか確かめてやる」
そう一方的に捲くしたててくる篠ノ之に呆れる。こないだ格の違いを見せたはずなのだがな。

そんなことに構うものかと教室を出ようとする。
しかし、篠ノ之の声が大きかったのもあり、クラスにいた生徒や廊下を歩いてた生徒達に俺と篠ノ之が勝負すると広まってしまったようだ。ここで断ると俺を好ましく思っていない奴らに餌を与えることになる。
現にそんな悪意の籠った視線が数多の視線の中に混じっているのを感じる。オルコットと戦うことが決まっている中で俺が篠ノ之との勝負から逃げたなどと騒がれる方が最終的に面倒になると考え、勝負を受けることにした。
「分かった。その勝負を受けてやるよ」
「ふん。ならさっさとついて来い」
そういって手を掴もうとする篠ノ之の手を避け、条件を出す。
「受けてやるが、一つ条件だ。俺が勝ったら、もう一生俺に関わるな。納得できないなら、お前が勝ったら一つだけ言うことを聞いてやろう」
「…いいだろう。その言葉を忘れるなよ」
自信に満ちた顔をして篠ノ之は了承した。余程剣道の腕に自信があるらしい。舐められたものだと思いながら、篠ノ之が道場に向かったのでそれに着いていった。
道場は篠ノ之が許可を取ってるはずもなかったので、俺が剣道部の主将に頼み込む事

になったりと問題はあったが、使用許可を得た。簡単に許可を貰えたのは篠ノ之が剣道界で強いと有名であり、尚且つ俺が学園で唯一の男子であり、剣一本で〈世界最強〉の座に登り詰めた姉の弟だからしい。

道場に着き、試合の用意を始める篠ノ之は嬉しそうに語りかけてくる。

「久しぶりだな、こうやって二人で剣道場で試合をするのは。」

「どうでもいいさ、そんなこと。それと嬉しそうにしているが、約束を忘れるなよ」

篠ノ之はあからさまに不機嫌な顔をする。いったい何を考えているのだろうか。望む返事が返ってくるわけないだろうに。

「それがどうした。私が勝てばよいのだ。それより、お前に合う防具はあるのだろうか？」

「別にいらん。竹刀さえあればいい」

「何を言っている？防具を着けずに試合をするなどと可笑しなことを言う」

篠ノ之は眉間に皺を寄せて疑問を浮かべる。それに嘲笑を浮かべて返す。

「一つ言う。俺はお前が居なくなってから打ち込んだのは剣道じゃない、剣術だ」

「なんだと！篠ノ之流剣術はどうした？」

「あれは剣術と言っても剣道という、スポーツに向いているものだ。俺が使うのは実戦

に特化したものだ」
正面を見ると顔を真っ赤にして怒っていた。
「そんな邪剣に走るとは、その腐り果てた性根を叩き直してやる！」

そう宣言した篠ノ之は防具を着て竹刀を構えた。
「怪我をしても知らんからな」
「当たらなければいいことだ。早く始めるぞ」
そこで審判を頼んだ剣道部の主将がルールを言う。
「今回は特別なルールで行います。相手が降参するか、先に技を深く当てれば勝利とします。それでは試合を始めます」
その言葉を聞き、竹刀の重さを確かめるように振るう。いつもより軽いから、そこも考慮せねばならないからだ。
「試合……開始！」
開始の合図とともに篠ノ之は素早く近づいてきて上段の構えをし、その一撃を振り下ろしてくるが体を捻って避ける。剣道の動きでは俺に勝てないと理解してないのだろう。
その後も攻撃を繋いで鋭い突きや横払いなどの攻撃をしてくるが、紙一重で避け、時

には受け流す。

――相手の一撃が竹刀だというのに重い――

そんな俺の回避ばかりの戦い方に憤慨して篠ノ之は怒鳴った。

「貴様、逃げていないで正々堂々と戦え！」

「お前は…そこまでか。予想外だったな、残念だよ」

思っていたよりも手応えが無さすぎた。

おそらく、実力と技術は上達したのだろうが、心が成長していないからだ。

本当に強い者は『力』・『技術』・『心』を持っていると先生は言っていた。篠ノ之は『心』が欠けているから歪な存在になったのだろう。

昔はまあまあ強かった。だから俺はあの頃の篠ノ之との試合を基準に考えていたが、ここまで力量が離れているとは思わなかったのだ。

考えてみれば自然なことだ。今迄、俺は躓くことは無かった。

だが、躓いて立ち上がるものもいれば、躓いたまま転がり落ちるものもいる。

篠ノ之は後者だった、ただそれだけ。

次の攻撃のモーションに入った篠ノ之は突如５メートル程吹き飛ぶ。
「はあ？」
「何が起きたの？」
「なんで篠ノ之さんは吹き飛んだのよ」
その光景に驚く野次馬たちだが、流石は剣道部のトップなだけはある。辛うじて主将は俺の突きが見えたようだ。そう突きだ、ただの突きを当てただけ。
「っ、勝者、織斑一夏！」
主将は少し呆けていたが、直ぐに判定を下した。

俺はそのまま竹刀を預けて、ここを去ろうとするが、結果を受け入れられない者が一人。
その現実を許容できなかった者は後ろから俺に竹刀を振り下ろす。それを感で察知し、振り向きざまに刀身の側面に掌を当てて軌道をずらす。狙いが外れた剣先は木造の道場の床をへこませる。
完全に振り向くとそこには俯いて竹刀を手にした篠ノ之がいた。

顔を上げた篠ノ之の目は濁り淀んでいた。目が合った瞬間、下段からの斬り返しが至

近距離で放たれた。周りから見たら目にも止まらぬ速さというのだろうが、俺には遅く感じる。先生の一太刀よりも軽く、鈍いからな。

危なげもなく回避すると、カウンターで回し蹴りを放ち、無防備な脇腹を攻撃する。怯んだところで預けた竹刀を掴み、鋭い突きを小手に食らわせて、竹刀を手放したのを確認する。

止めに腰を落とし、右手を弓を引くように構える。その次に左足を強く踏み込み、矢に見立てた右手を篠ノ之の鳩尾に当てる。当分は意識が戻らないだろうと確信し、篠ノ之の持っていた竹刀を調べる。

違和感の正体は竹刀に仕込まれた鉄心だった。これは鍛錬を行う時に使用する物だろう。どちらにしろ当てれば重傷を負わせる凶器の竹刀を主将に預け、謝罪を済ませるといつもの様に鍛錬に向かった。

あれから、篠ノ之は俺ともクラスメイトとも話さなくなった。ただ青ざめた顔で上の空な態度で日々を過ごしているようだ。ずっと、一人孤独に。

クラス代表を決める試合の当日の放課後になった。朝は快晴だったのだが、昼には雲が空を覆うように広がり始め、今にも雨が降りそうだ。

ピットには俺と簪と姉がいる。簪は機体調整の手伝いと私情によって此処にいる。それに姉が許可を出したからだ。

しかし、委員会の用意した機体がまだ届かない、試合開始時刻の十分前だというのに。

間に合わない時の為に用意された打鉄の状態を確認する。機体状態は良好、装備は刀剣〈葵〉を十本だけ。開始時間が五分を切った時に、山田先生が慌てて控室でもあるピットに入ってくる。

「お、織斑くん織斑くん織斑くん！」

慌てているようで、駆け足でピットに入って来たのだが転びそうになったのを俺は見逃さなかった。

「山田先生、とりあえず落ち着いてください」

「は、はい。もう大丈夫ですよ」

深呼吸をして息を直ぐに整える山田先生。

「それでですね。来ましたよ、織斑くんのＩＳ！」

漸く届いたようだ。試合のギリギリ前になんて、納入するには遅すぎだろう。これで粗悪品だったら最悪だな。

「織斑、直ぐに準備しろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。フォーマットとフィッティングは実戦でしろ」

滅茶苦茶な事を仰る。幾ら恨みを口にしても意味は無いのだから口を開こうとしたが閉じる。

ごごんっ、と鈍い音を立てながらピットの搬入口が開く。

その防壁扉の向こうには

『白』が、いた。

白。ただただ白いだけ。

嘘偽りのない潔白の白。

それを人は穢れなく美しいというのだろうが、俺にはどうしても無理やり白いペンキをぶちまけられただけに見えた。

本来の『色』を塗り潰され、『偽の色』を塗り固められているようだ。

泣いているようだった。何故かは分からないがそう感じた。

可哀想だと思った。この俺がだ。

無機質だが涙を流すそれは、俺に手を伸ばしているようだ。俺に何を求めているのだ

ろうか？

山田先生の声で思考の海から浮上する。

「これが一応織斑くんの専用機になる『白式』です」

ずっと眺めている様にもいかないので、とりあえず装着して戦いに向かうとしよう。

そこに姉が指示を出してくる。

「さっさと装着しろ。そうだ、背中を預けるように。座る感じでな。後はシステムが最適化してくれるだろう」

不思議な感覚だった。例えるとすれば後ろから抱かれ包み込まれる感覚で、とてもあたたかった。

俺の体に合わせて装甲が閉じる。この一体感に首を振る。本当の姿ではないのだろう。

視界が変わる。３６０。を見渡せるようになったが気持ち悪いな。

そう思うと視界は前方だけに広がる、優秀だな。

「しっかりとハイパーセンサーも機能しているな。一夏、気分は悪くないか？」

本当に心配しているのだろう、いつもと声色が違う。笑顔を貼り付けて返す。

「大丈夫だよ、姉さん。行ってくるよ」

「そうか」
　ほっとしたようだ、そこで装備一覧が開かれると、そこには近接ブレードしかない。眉を顰めながら簪に頼みを言う。
「簪。この機体には武器が剣一本しか積まれていないんだ。打鉄から葵を二振りほどこっちに入れてくれないか？」
「え？剣一本だけ？ふざけ過ぎでしょう。ちょっと見せてね」
　そういって機体にケーブルを差し、空中投影ウィンドウを操作している。
「んー、でも空いている容量がもうないみたいだけど……　あれ、まぁここならいけるかな」
　そう言って数十秒間操作すると、打鉄の方から送られてきたであろう葵がＩＳの腰部に鞘に納められた状態で装備された。何故機体に直接なのだろうかと疑問に思い、簪に問う。
「どうして量子変換しないんだ？」
「そっちは空いてなかったから、機体の容量に空きを見つけたから無理やり突っ込んだんだよ」
　そうか、と返してアリーナへのゲート前に立つ。時間ギリギリだ。オルコットはもう待機してるみたいだ。飛び出す前に簪に一言告げる。

「勝ってくるよ」

そして、ゲートを飛び出し、巨大なアリーナで待つオルコットの元に向かう。

第9話

総てを勝ち取った先に待ち受けるもの
はたして、何であるのだろうか？

それはおそらく……『　』だ。

空は暗い色の雲で覆われた曇天。
ぽつぽつと雨が降り始めた。
まるで天が涙を流しているようだ。
それは、これから先に起こる悲劇に対する不吉な兆し。
まさに暗影と呼ぶに相応しいモノだった。

そんな中でＩＳ学園にある第三アリーナの観客席はほぼ満員に近い状態となっており、会場には様々な生徒がいる。雨合羽などの雨具を身に着けたりするものや、勝敗の

行方を予想して話し合ったり――賭博を行う者もおり胴元は新聞部の部員だ――、ただ何となくＩＳの試合だからと野次馬に混じった者もいる。

これだけで、この試合がどれ程注目されているか分かっただろう。なにしろ対戦カードは今話題の世界で唯一の男性操縦者とイギリスの新型機を所持した代表候補生だ。それに入学して直ぐということもある。年頃の少女たちはこんな小説や漫画の中の様な話にはよく食いつくことだろう。

試合開始時刻が迫る。観客席は試合が始まる時間が近づいたので静かだったが、もう一人の出場者が出てこないので少しずつざわめきが広がり、騒がしくなった。

これには理由がある。

大体の公式試合では操縦者をよく見せる為だったり、パフォーマンスで注目を集めたりする為に開始五分前にはステージに居るのが暗黙の了解としてある。

何故そんなことをするのか。それはＩＳがスポーツとして世界中に広まり、その操縦者はアイドルの様に扱われるからだ。それは今回の試合に出場するセシリア・オルコットにも言えることであり、彼女は何度も雑誌の記事に載っている。

それはさておき、予定開始時刻の一分前。
Ａピットの隔壁が開いた。
ようやくもう片方の選手、織斑一夏が登場すると観客たちは女性特有の高い声で盛り上がる。その声援に応えるように白い影が勢いよく飛び出す。
その影はＢピット寄りの中央、つまりセシリア・オルコットの待機する方に真っ直ぐに空を切り裂き突き進む。

突然な出来事に、対戦相手がなかなか出てこないことにイラついていたオルコットは無意識に防衛本能が優先されて咄嗟にライフルの引き金を引く。セーフティーを外されていたライフル〈スターライトｍｋⅢ〉は銃口からレーザービームを発射する。
いくら驕っていようと代表候補生であることには変わりなくその腕前はとても高い。彼女にとって正確な射撃など不意な出来事でいようとも造作ないことだった。
そして彼女の狙撃、それは完全な不意打ちであった。素人の織斑一夏に防ぐこと、又は回避するのは不可能な話だった。
ただしそれがただの男ならばだ。

織斑一夏、彼は戦士である。

刀を振り、戦場に生き、我武者羅に力を求める狂人である。
彼は才能に満ち溢れ、努力を怠らず、確固たる信念に従う人間である。
その心は何事にも動じず、手段を選ばない怪物である。
彼の力の片鱗を知り、恐れを抱いた者たちはこう呼ぶ、『ヒトデナシ』と。
彼が人として認められない理由、この試合でその一端を垣間見ることが出来るでしょう。

試合開始前だというのに彼の目の前にはレーザービームが迫っており、瞬きをすれば当たっている筈だろう。観客の悲鳴が、囃し立てる声が混ざり合い不快な雑音を奏でる。見ていられないと顔を隠す者や、男を嫌う者は嬉しそうに声を上げる。

刹那、誰もが息を呑む。
白式に直撃するレーザービームが消えた、いや掻き消されたのだ。織斑一夏によって。
だが誰もその光景が信じられない。何が起きたかも分からなかったのだから。
それは手練れの各国の代表候補生も、国家代表の選手も、ベテランの教員たちでもだ。
だが、ただ一人だけその瞬間を見ることが出来た者がいた。

世界最強と謳われたＩＳ乗り…織斑千冬だ。
何故彼女だけ見切れたか。それは彼女が剣だけで世界の頂に登りきった経験、常人離れした身体能力があってこそだった。
故に誰よりも驚き、そして恐怖する。
織斑一夏がしたのはただの抜刀。いうなれば、居合と呼ばれるものだ。
居合術は刀を鞘に収めた状態で帯刀し、鞘から抜き放つ動作で一撃を加えるか相手の攻撃を受け流し、二の太刀で相手にとどめを刺す形・技術を中心に構成された武術であり、彼はその技を使ったのだ。
有名な技でもあり知る人も多いが、それを自由自在に使いこなせる者はどれ程いるのか。
それをＩＳという生身とは勝手も違い、空中という想定されていない状況で咄嗟に技を繰り出す。これは千冬でも可能かもしれないが、難しいことだろう。
そこまでならまだ千冬も驚くだけだった。だが、一夏はその上を行ってしまった。
千冬でも越えることができない、正しくは越えない壁を越えていたのだから。
千冬の見た一瞬、その一撃は迷いがなく、乱れがなく、ひたすらに真っ直ぐであり、まるで呼吸をしているかのように当たり前に振られ、長年の経験で養われた直感が無けれ

ば気づくことすらできない意識と意識の間に生じる認識できぬ僅かな空白の時。その間に振られた斬撃は間違いなく人を殺すための技術の結晶。それは千冬には手を伸ばせない所業であったからだ。

千冬は頭の中が真っ白になり、ぶるぶると震わせる体は鳥肌が立ち、顔は真っ青だ。
止まった思考は一つの疑問が生じたことで動き出す。
同じ問いが浮いては沈み、ぐるぐるとまわり続ける様はメリーゴーランド。
なぜだ?なぜだ?どうしてかはわからない。ずっと、ずっと。
疑問は尽きぬ。答えは闇の中で模索するしかすべは無し。
見つけた答え、導かれた答え、与えられた答え。総ては真実かもしれないが虚妄かもしれない。
ただ疑問は簡単な事。答えも簡単。ただ過程を知らぬが由に受け入れられずに分からず仕舞い。
『どうしてそこに立っている?』、と。ただそれだけ。
分かり切った事だが、彼女には理解できない。
答えは一つ、最初からそこにいたからだ。

千冬が口一つ動かさないので隣にいる山田摩耶は混乱していたが、自分自身に落ち着くようにと言い聞かせるように息を吸って、息を吐く。そして代表候補の時からの馴染みある先輩に声を掛ける。

それは、オルコットにペナルティを科すかどうかという内容だった。

当然の話なのだが、試合の始まる前だったのでルール違反として処理する筈だったが、千冬は結局そのまま決行すると決めた。

理由は単純な事だ。不満があったから試合を行うというのに、オルコットを不戦敗にして一夏を勝たせても誰も腑に落ちないからだ。

すぐさま二人に決定した方針を通信で伝える。

オルコットは平静を装っているようだが遠目からでもその焦りは見て取れる。なにより、返事の声がいつもの自信に満ちた彼女らしい態度とは違い、上擦った声だったからだ。

それに対して一夏は上機嫌な様子を隠そうともしなかった。通信を切った後も彼の鼻歌をＩＳが拾って、開放回線（オープンチャンネル）に流している。

オルコットは絶対に勝てない。

千冬は未来を予知する様に、弟が愉しそうに嗤いながらオルコットを地面に叩き付ける光景を幻視する。千冬はそれが現実にならないように祈ることしかできない。

それはきっと皆が不幸になるから。

思い描いた理想（世界）が崩れるから。

だから、拒絶する。今までの様に。

だが、千冬には運命は微笑んでくれない。彼女にはどうすることもできない。

だって、物語の結末（ENDING）への道は既に通り過ぎている。

望まない明日でも世界には必ず訪れるのだから、誰もがその日に向けて歩むのだ。

天気は雨。

千冬の願いは叶わないと暗に示すように雨が降る。

小さかった雨粒も次第に大きくなり、地を叩く水滴は多くなっていく…

第10話

きっとこの思いは許されないだろう。
赦されない罪。赦されない存在。赦されない感情。
そんなモノばかりを得てしまい、如何にもできずに、ただ苦しむ。
だってそれは、それこそが正しいのだから。
裏切り者の
織斑一夏(俺)には

その男は笑っていた。
楽しそうに、愉しそうに、笑顔を浮かべ、その笑顔は純粋な子供の様だった。
いや違う。それは何処までも空虚な心。

目を見ればわかる、可笑しな存在。
顔に浮かべる無垢な笑みは、ニヒルな笑みに。

闘争心に満ち、戦いを望む心は、奥底では本当は酷く冷たい。
常に真逆な表裏一体というのは異質だ。見てて吐き気を催すほどの異物。
常人にはできないからこそ、狂っている。

それが彼の本質、本当の姿。
何年も何年も隠し続け、誰にも知られずに、すくすくと成長していった。
此処まで大きくなってしまったら止めることは出来ない爆弾のようなもの。最初から壊れていた彼にはどうしようもなかったこと。
しかし、彼が何よりも望んだことは孤高であること。
世界に縛られ、操られ、翻弄されることがなくなる為に。
だけど、壊れた硝子細工は治らない。ただ割れて、周囲を傷つけるだけ。

試合開始の合図の電子音が鳴り響き、セシリア・オルコットは天高く飛翔する。逃げるようにぐんぐんと。視界の端々に流れていく光景もＩＳの補助で情報を整理しハイパーセンサーによってその目にクリアに映る。
試合開始直前に宙に留まる自分とは逆に、地に足を付け堂々と立っていた織斑一夏は

同じ人間とは思えないような事を仕出かした。その時に感じた畏怖の気持ちがずっと自分の頭の中にこびりついて離れない。地面に足をついて立っていたらきっと膝が笑っているだろう。

そこには少し前までは自信に満ちた誇り高い女性ではなく、お化けに怯えるような少女が一人。

試合が始まって間もないというのに彼女は恐怖に包まれていた。

それだけショックだったのだ。下に見ていた男が、何歩も先を行っていたはずの自分を軽々と越える実力を発揮したのだから。

こんな姿はオルコット家の当主に相応しくない、と頭を振り、怯える自分を叱咤する。

考えろ、思考を放棄するな。考えることを辞めたなら、それは降伏と一緒だ。

自慢の狙撃も正面から防がれてしまった以上は効果は期待できない。麻痺していた頭は理論派だからこその冷静な判断で距離を離すことを最善とした。空中ならＩＳに搭乗時間も長く、経験のある自分の方が分があると判断したからだ。

正しい判断だった。いつもの彼女なら相手との距離を一定に保ち、ビットとライフルでじわじわと削っていく戦い方だが、それはビットが距離を離しすぎると集中力を余計に消費するからだ。

そもそもビットは第三世代機の兵装の中でも適性というものが高くなければいけない。

その適性は、主に並列思考、空間把握能力、演算能力を多少といった具合だ。

ＩＳの戦闘ではビットを複数個を操りながら自分も動くことを前提としなければならない。ＩＳを使った戦いで棒立ちの戦いなど機動力の高いＩＳには的の様なものだ。

だから、同時に事を為す為に同時操作を行い、空間を把握して指示を出すということをできなければならない。

戦力の分析ではビットは一対多数という戦況が想定されているので、試作機ということでまだ数が少ないが四基積まれている。それを標的が一人に絞れていると単純な計算だと五対一という有利な状況になる。

そうすれば人外な織斑一夏であろうと捌き切れずに被弾するだろう。多少距離が離れたことで負担が増しても、負けた時の方が恐ろしいのだ。

何処からか情報が漏れていたのだろう。今回の件がイギリス政府に知られてしまっていた。試合に関しては専用機を使う時は代表候補生には所属する国に報告する義務がある為、言い訳を用意していたのだが、問題はオルコットが日本を貶める発言をしたことだ。それすらも知られていたのは予想外だった。

その為、彼女に後は無い。
あろうことか女王陛下にまで知られてしまったので、このままだと貴族としての地位を失うだけでは済まない。確実にオルコット家は潰される。

それだけは認められない。自分は何故此処まで血反吐を吐くのを耐えながら努力してきたのか。
それはきっと母の為、オルコット家という先祖の形見を無くさない為だった。彼女の誇りも財産も心も、全てそれが有ってこそだった。親もなく、それすらも失ったら、残るのは空っぽのセシリア・オルコットというただの敗北者。
故に、体裁も誇りも自信もかなぐり捨てて、価値を示し、未来を勝ち取らなければ生き残れない。
「認めない！私は生きる。どれだけ皆の目に醜く映ろうと、私が、私である為に」
その決意は彼女が知ることのないＩＳの意志が汲み取り、共感し、彼女に同情することで稼働率が上がっていく。

ＩＳは操縦者を理解し、経験を蓄積して、成長する。
それにはＩＳの好みというものも関わってくる。

自らの信念というべきか、心の在り方が定まっているほどＩＳは操縦者の心を強く認識できる。逆に特にそんな考えを持たない操縦者、例えばＩＳをファッションの様に認識している生徒は芯が真っ直ぐではないので共感を呼ぶことができない。

そして好み。それはＩＳを道具の様に扱うものには嫌悪を示し拒絶する。個体差はあるが差別意識が強かったり、人格が破綻している者にも拒絶を見せる。

他にも、争いが苦手な心を持つＩＳは好戦的な操縦者を苦手として、稼働率が下がるなんて言う話もある。要は相性の話。そこが問題としてＩＳの好み、心を制限するプログラムがＩＳ適正の正体であったりする。

オルコットは適正率が高いのに、稼働率が低い理由。それは極度の女尊男卑、差別的思想の所為だった。

しかし、その意識を捨てたオルコットにＩＳは拒絶せずに共感する。

ビット四基を開始地点から動かぬ白式に飛ばす。それを一夏は面白そうに眺めている。まるで玩具を与えられた子供の様な笑みを浮かべている。ただ、片目はずっとオルコットを射抜いていることが彼女に緊張を奔らせるが、オルコットは距離を詰めずにただ眺めているだけの一夏の周囲にビットを配置し終えた。

一夏の表情は時々硬くなる。痛みに耐えるように。
一夏は何もしない。何かすることと言えば、歌を口遊み機体から送られる情報に目を通すだけ。
［警告：周囲に敵第三世代兵装〈ＢＩＴ〉四基が包囲網を形成／危険度　中レベル］
［推奨：破壊］
『♪～♪♪～』
最初は様子見からだろう。一夏の行動をそう判断したオルコットは早期決着を決断し、ビットで攻撃を開始する。
この時、今まではビットの操作だけで精一杯だったのがＩＳの補助が加わり機体の制御も両立することができたのだ。
射撃を始めるオルコットに一夏は微動だにせず、ただ目を動かし、耳を澄ませ、空気の流れの中の歪みを見つける。それは最早人間ではなく獣の様だ。
感覚を研ぎ澄ます一夏に白式は邪魔にならないように小さな警告文を視界の片隅に表示する。
［警告：ビットに加え、敵機に狙われています］
［報告：使用武器　スターライトｍｋⅢ／危険度　高レベル］
［推奨：回避行動］

オルコットの射撃はどれも精確であり、一つ一つの攻撃が繋がっている。
相手の回避先を事前に読み、タイミングをずらすことで相手に攻勢にでる隙を与えない。これでは如何に器用な者でもいずれ限界を迎える筈だ。
そんな文字通り四方八方からレーザービームが飛んでくるという並みの操縦者だったら全てを防げぬうえに過剰としか言えない徹底した戦略。
だが根本的な問題でオルコットは一夏を倒せない。

人は獣に勝てないからだ。
なぜなら人は食物連鎖の頂点ではない。
では何故人が最も繁栄したか？
それは他の動物にはない知恵と本能に刻み込まれた群れる気質があるからだ。
一人ではできないものも個々に役割を与え補い合う。
社会を築き、文化を築き、それを後世に残す。それを積み重ねた結果、地球で最も繁栄したと言えるのではないか。
だが、幾ら発展しようとも多くの人間には限界がある。身体能力など最もたる例としてあげられる。
人は肉食動物と素手で戦ったら勝てるだろうか？常人には不可能である。

しかし、人には知恵がある。武器や道具を作り、罠を使い、弱点を探す。そうすれば勝てるのだ。
だが、それも常識の範囲内でしか通用しない。
何故なら人は自然災害を防ぐことは不可能であり、書物や言い伝えにある怪物、化け物を倒すことは出来ない。
それを成し遂げられる例外は勇者や英雄と呼ばれる超人だけだ。
そう。織斑一夏は獣のようでありながら、正しく超人と呼ばれる者に分類される。
それゆえに何重にも敷かれた罠を噛みちぎり、束縛する鎖を引きちぎり、邪魔な檻を破壊する。

空ばかりに憧れ、肉体を枷と決めつけ、絶対者に焦がれる者たちと対を為す存在。
空を一瞥し大地を見据え、肉体を自身と定義し、強く在る者。

空とは手を伸ばしても決して届くことは無い理想。
肉体とは在るがままに受け入れるしかない現実
彼は壊れていながらも完成している。
いや、これからも成長するのだから完結というべきだろう。

それを誰が止めれるというのだろうか？

「そんなもの見えている」

迫る閃光に逃げ場は封じられた。だが、隙間がある。

彼にはそれで十分だ。

ドスン、という音を立てて機械仕掛けの翼は地に堕ちた。与えられた翼などはいらないと言う様に。

身軽な動きですいすいとオルコットの方に向かう。レーザービームが避けているかのように当たらない。

オルコットは一夏の間合いに持って行かれないように円形のフィールドに沿いながら不規則にパターンを変更し予測されないように飛び回る。

「貴方はどうして強いのですか!?こんなこと、在り得るはずがないですわ！」

「在り得ないなんて事こそ在り得ないんだ。ただ受け入れないだけだろう」

「貴方には分からないでしょうね。私が、いえ私たちＩＳ乗りが必死に努力して積み上げてきたものを掻っ攫い。ぽっと出のくせに珍しいからと優遇され、挙句才能だけで此処に居る。自分だけ特別なのはどんな気分でして！」

「それが何だというのだ。それに俺は努力をしなかったことは一度もない。お前には物

事の本質が見えていない」

「黙りなさい！」

中央で立ち止まった一夏は左腰に差した葵に右手を添える。

そして、走り出した。一歩足を前に出す度、地を蹴った鎧の足は削れて形を変えていく。

オルコットは追いつかれると思い、生身の癖で一夏の方を見ると右手は振り抜かれ、持っていたであろう刀剣が回転しながら進行方向に迫ってきてる。急いでスピードを下げるが背中に強い衝撃は走り、鋏に切られる様な形になる。オルコットはシールドエネルギーは思ったより減っていないことに安堵するが、致命的な隙を見せていることに気づき、距離を取ろうとするが、壁際に追い詰められている為逃げ場がない。

一夏が接近してきたが苦手な近距離武装は出している時間が無いと判断し、ライフルを構えて引き金を引く。

ＩＳの補助が無ければ気づいた時には当たるほどの弾速、それがレーザービームの特徴だ。

だというのに目の前にいる男は全て避ける。笑いながら。

オルコットはその笑みを見る度に一夏と自分の父が重なるのだ。彼女は父を取り繕った姿でしか世の中を生きられないなんて、と貴族としての矜持から嫌っていたの

だ。

だが目の前の男は反対だ。力があるのに弱者を装い、相手を嵌めることで障害を排除しているその姿。強者なら堂々とするべきなのだ。

「どうしたオルコット。お前はその程度か」

「舐めないでくださいまし！」

ライフルは銃身が長いため懐まで入られたら為す術が無い。

だからライフルを槍のように突き出すと当然一夏は左手で受け止める。それが彼女の起死回生の一手。

オルコットは理論型故の焦りがあった。何故なら彼女のバトルスタイルは計算された行動に持っている技術を費やして完成するからだ。

そこに想定外の行動をされ続ければそのバトルスタイルは破綻する。だから勝負を急いだのだ、手が付けられなくなる前に。

ただ土壇場で一皮むけた彼女は前と違い教科書通りでなくとも大胆に行動できる。

「この距離なら外しませんわ！」

事前に危機を察知していた一夏だったが回避は間に合わない。仕方なく上半身を逸らし左手を犠牲にする。

銃口から0距離射撃の為、発生した熱に溶かされ、ビームで貫かれ左手の機械腕は無

残な状態になるが、構わず右手でオルコットの顔を掴み何度も何度も壁に叩き付ける。
ドゴン、ドゴン、と響く音は悍ましく、観客たちは声にならない悲鳴を上げている。
オルコットのＳＥが四分の一ほど削るほどの攻撃だったので、今度は右手の機械腕が耐えられずにバラバラに崩れていく。
後ろに振りかぶった時に自壊し、当然オルコットは投げ飛ばされる。
もう両腕は使えないが、腕が使えなくても足がある。また近づくと今度は蹴りで潰すだけ。
ガン、ガン、と金属同士がぶつかり合うことで発生する耳触りな音が会場に響き、会場は一夏に対する野次が飛び交う。
そんな中ヒュン、と空を切る音が背後から聞こえ、一夏は咄嗟に前に跳ぶが間に合わず背中にビットが直撃して体勢が崩れる。
その隙にオルコットは使えなくなったビットを捨てて、ライフルを拾う。
オルコットのＳＥは半分を切った。それに対して一夏は無傷と言える程の残量がある。
「いいぞ。とても面白かったよ、オルコット。まさかビットを使って体当たりとは予想外だった」
「その奇襲を受け流した人に言われましてもね。それにしても貴方、手足の機械（マニピュレーター）の四肢

のシールドを切ってたんですの？」
「ああ。邪魔だったのだが、機体の本体の一部分だから切り離せないんだ」
「イカレてますわ」
ケラケラと呑気に笑う彼と正反対にオルコットは現状打破の術を探る。
状況は圧倒的に不利であり、戦闘技術も経験も相手の方が上である。
相手は理性ある獣だ。単純な罠も常識も簡単に食い破る。
勝てる見込みがないのだが、逃げることもできない。
もう分かっていたことだ、勝てないと。
だが、人は諦めてその現実を受け入れたときに敗北する。
だから足掻いたのだ。見苦しかろうと進み続けなければ死人と同じだから。
それでも雨は止まず、彼女の代わりに涙を流す。

だが、彼女にはまだ光が差していた。
今にも沈みそうな夕暮れの太陽。だが一際輝き燃えるような茜色の光が。
『二次移行（セカンドシフト）が完了しました。確認ボタンを押してください』
オルコットの目の前に現れたウィンドウ。それを確認したオルコットは即座に押す

とブルー・ティアーズに変化が現れる。
ボロボロだった装甲は新品の様に新しく。
壊れたＢＩＴもそれぞれ形がスマートに、数も８機に増えた。
傷だらけの銃身だったライフルも綺麗になり、新しい二丁のビームピストルが太腿に収納されている。
以前と全く違う機体なのにそれでいてどこか馴染みのある感覚。

「ここからが勝負でしてよ！」
ライフルからレーザービームが放たれる。それは以前よりも連射が出来るようになっている。
以前の比ではない弾幕だ。
それに回避されて的に当たること無く、観客席を守るバリアにかき消される筈だったビームが曲がって更に一夏を追い立てる。
それはＢＩＴ偏光制御射撃（フレキシブル）と呼ばれる技術で操縦者の適正がＡ以上、ＢＴ兵器稼働率が最高状態にある時にのみ使用可能な能力と言われている。
その射出されるビームそれ自体を精神感応制御によって自在に操ることができるという切り札にもなり得る能力。

そして一夏は徐々に被弾していく。様子がどこかおかしい。
よく見ると顔色が悪く体調に異変が出ているようだ。
しきりに頭を手で押さえ、呻き声が出ないように我慢している。
彼自身にも訳が分からないが身に覚えがあることは確かだった。
「痛えなあ。滅茶苦茶痛え。頭の中を内側からガンガンと叩かれてるみてえだ。一体何が起こってやがる」

ズキッと鋭い痛みが奔る
頭が割れるように痛い。こんな痛みは初めてだった
ナニカがこみ上げてるように自身の内で暴れているのだ。

疑問が生じる。
今まで考えつかなかった事だ。まるで思考を誘導されていたみたいに。
この慢性的に起こる頭痛。それは体質だと思っていたが、昔はそんな事が無かった筈だ。
では何故だ？
そういえば、酷く自分を傷つけたく、殺したくなる時がある。

その酷く不快な感覚を感じる様になったのはいつだろう？
たしかそれはあの誘拐された夏の日だった筈だ。

記憶の奥底、深い深い海底にかつては日の光を浴びて悠々と浮かんでいた船たちの残骸が山積みになっている
そんな中に、ひときわ輝く宝箱が一つ
それは鎖で縛られ、決して開く事が出来ない様になっていた
だが、その鎖は錆びついて脆くなっている
少しの衝撃で壊れてしまうことだろう

彼の目前に一つのウィンドウが出てくる。
『想起が一定値を超えたため最適化処理を行います。』
『私を受け入れてくれますか？』
答えは知っていたかのように考えるまでもなく自然に口から出てくる。
「ああもちろんだ」
答えを返すとウィンドウは閉じられ、視界に無数の数字が流れる。

『e381933828ce381afe9818be591bde381aee7

a59de7a68f

8a7a3e381ade694bee381a4

4e6966b9e3829292e591aae7b89be381be3829e

1aee6998e3829292e4bba5e381a3e381a6e8b2b

4bc9ae3829292e7a59de3818413803813193e38

e7a781e381a8e8b2b4e6966b9e3381aee5868de

e69c9be381bee381ace8808 5e3828 2e3818 4e

3828be381a7e3819 7e3828 7e3818 6

e8aab0e3818be381aee6809de3818 4e3829 2e

7843a1e4b8888be3813aab e3819 9e3828be3819 3e38

1a8e3813abe3813aae3828be3813a7e3819 7e3828

7e3818 6

e3819de3828ce3813afe5bf83e3818ce5828b7e

e3819 1e3828ce3813a9e7a7813e3813afe8b2b4e

3813a4e3818fe88ca8e3813aee9819 3

6966b9e3813a8e4b880e7b792e3813aae3828 9e38

18de381a3e381a8e6ada9e3819le382 8b
e6ada9e3822 80e3819 3e381a8e3818ce7bdaae
381aae3822 89e3819deee3828ce3818ce7949fe38
18de3828 8be3819 3e381a8
e381a9e3818 6e3818be7a781e3819fe381ale
381abe7a59de7a68fe38292』

一方管制塔は大混乱のまっ最中であった。
なぜなら白式の行った進化。それは今初めて確認された事象であり、過程も理論も分からなかった。
更に異常事態の種は蒔かれる。
一夏の乗る白式をモニタリングしていた真耶は叫び声に近い声を上げ現状を報告する。
「織斑先生、これを見てください。白式と織斑くんのシンクロ率を測定していたのですが、９０台を越えた後測定不能になりました。こんなこと前代未聞ですよ、今日乗ったばかりの機体だというのに」
「更にＩＳのプログラミングが物凄い勢いで書き換えられており、リミッター…通称〈首

輪〉と呼ばれるもののプロテクトすら破られました。それで止められなかった以上如何にもできません」

その内容に千冬は驚愕する。

「あの〈首輪〉はＩＳの生みの親の束が直々に作ったものだぞ。それが破られたら確実に一夏は潰れてしまうだろう…ＩＳの意志に塗り潰されて何人の人が廃人になったか知っているか？山田君」

「すいません。その話は噂程度にしか…」

「そうか。実際に稼働実験中に精神崩壊などの心的な障害を多く患った者たちの数は２０００人にも及びそのうち１００人強が自殺したんだ」

「そんな…」

突如ピーッと危険を伝える音が鳴る。急いでモニターを見るとＩＳに掛けられているいる性能的なリミッターや封印されたＩＳの特殊な機能のリミッターが外されていく。

「不味い、ＩＳが織斑くんに精神干渉をはたらいています。どうしたらいいでしょう？」

「緊急停止信号はどうだ？」

「ダメです。こちらの命令を受け入れません」

キーンという産声のような音が聞こえると白式に関するウィンドウが全て閉じられ

た。
白式だったものからはもう情報は得られない。
キーンという耳障りな音が聞こえて観客は耳を塞ぐ。
しかし、彼には心地よく聞こえたみたいで先程までの病人の様とは反対に生き生きとしている。

白式の装甲の隙間から光が溢れ、全体を覆い隠す。その卵の様な白いエネルギーの球体に罅が入り、異質な姿が目に映る。先程までの機械特有のシャープな装甲は菌の入りこんだ傷口のように膨らんでいる。
その殻を跨ぎ地に足を着くと、その弱い振動が全体に広がり歪な装甲が硝子の破片の様に辺り一面に砕け散る。
それは到底ＩＳと呼べるモノではなかった。先程の機体よりも一回りも、二回りも小さく、身長が高い大人ような大きさしかない。
だが、それよりも目に行くのは腕部や足にある引き締まった筋肉だ。大部分が黒い人工筋肉で覆われ、金属の装甲は少なっている。それはとても人間味のある肉体だった。
先程の真っ白な装甲とは真逆の漆黒。

更に筋肉の鎧の上に破片となっていた白い装甲が集まり、金属の鎧が出来上がる。

「ああ、とても馴染む。重しが無くなったみたいだ」

一夏の中には先程までの痛みは消え失せた。そう己を縛っていた拘束から解放されたのだ。

代わりに何か優しいモノが生まれた。いや、沈んでいたものが浮き上がってきたのだ。

だが今は押さえつける。

戦場に戦士として立っている一夏は万全の態勢で相手に挑むからだ。

「待ってろ。あと少しで終わらせる」

「私はまだ戦えますわ。甘く見すぎないことね!」

その独り言をオルコットは挑発として受け取り、攻撃を再開した。

だが、当たることは無い。余裕の表情の浮かべる一夏は高周波ブレード〈徒桜〉を鞘に納められた状態で呼び出す。

そしてこの試合で始めて感情を籠めた声を上げる。

「いくぞオルコット。死んでくれるなよ！」
そういって一歩踏み出した瞬間、稲妻が迸る。
パチパチと紫電を纏い地を駆ける一夏。
その瞬間的速さはＩＳの中で一番だろう。
幾らオルコットがビームを放とうが掠りすらせず足止めもできない。
急いで後退しようとするが目測で１０ｍほど前で左手に鞘を握り、今にも抜刀できるよう右手を柄に掛ける一夏の姿が見える。
それは死神が鎌を構えて命日を告げるようだ。
高周波ブレード独特の甲高い音と一緒に音もなく振るわれアーマースカートが斬り落とされた。
濃厚な死の気配にむせ返り、胃液が逆流し喉を焼きながら口腔を不快な酸味で埋め尽くす。
だが決してその吐瀉物を吐き出しはしなかった。
それが彼女の小さな抵抗で精一杯出来ることだった。
その後は一方的な試合。
何度も切り刻まれてＢＩＴも潰された。
自分の得物は踏みつけられぐにゃっと折れ曲がった。

慣れないショートブレードもスパッと真っ二つに斬り捨てられてしまった。
無抵抗なオルコットはＳＥが無くなるまで斬られ、蹴られ、地面に叩き付けられた。
最後の突きの技の時に隠していたミサイルピットで悪あがきをするが無駄に終わり、敗北した。
試合後、オルコットは左目が潰れ、左手が使えなくなってしまった。
傷が治るころには彼女は本国に帰ったそうだ。

夕焼けの太陽は一際輝いた後に沈んでいく。
それが常であった。

Ne m'oubliez pas

おめでとう
さようなら
ありがとう

今頃、観客席にいた生徒たちは寮の帰路に着いているだろう。流石に距離が離れているとはいえ、ショッキングな光景だったのだ。生徒たちは一様に暗い顔をして静かにしていた。

管制室に居た千冬は試合の終わりを告げるブザーが鳴るとハッと意識を現実に戻し、生徒たちに帰宅する様に呼びかけたのだ。

「山田君、生徒に寮に帰宅する様に伝えてくれ、その他の動ける先生はオルコットの搬送を手伝ってください。一応ＩＳの護衛も」

「分かりました。織斑先生、織斑くんはどうなるのでしょうか？」

「それは私にもわからない。何て言ったって織斑は競技中に相手に怪我を負わせたんだ。今までＩＳの絶対防御があったおかげで、そういうことに関してのルールなどはあ

まり決められていないんだ。これからは新しく競技中の事故に関する措置も整えられていくだろうが現時点では当事者たちの所属する日本とイギリスがどれだけ意地を通すかにもよるな」

「そう、ですか」

山田先生は辛そうな顔をしている。もしかしたら自分の生徒が刑務所暮らし、なんてことになるかもしれないのだ。先生として生徒思いで責任感の強い彼女はきっとそうなったら大変気に病むだろう。

千冬も心配じゃないわけではないがただＩＳに関わっている公務員に過ぎないのだからできることはほぼないのだ。

いくらブリュンヒルデＩＳの世界大会、モンドグロッソで総合優勝者となったものは〈ブリュンヒルデ〉と呼ばれるといわれようとも発言力は有っても政治的権力は無く、日本政府に大きな迷惑をかけたことで貸しがある。そう強気には出れないのだ。

「それでは山田君。私は現場で指揮を執るからここは任せるぞ」

「はい、了解しました」

しなければいけないことは沢山あるのだ。まずは目の前の仕事から片付けようと千冬は足を進める。

それにしても解せないのだ、一夏の白式に起きた変化。あの現象は束と仲が良かった

ため、ＩＳについても色々と教えられたが一つとしてその現象に関連するものは無かった。形態移行だとしてもそれではあの人工筋肉はどう説明すればよいのか。

ＩＳに物質を生み出す力は無い。あるのはエネルギーと成長プログラムだけだ。形態移行をするときは機体のパーツをもとに作り替えたり、予備のパーツを持ってきて補うのだ。だからあの機体は異常なのだ。人工筋肉は最近医療関係で発達し、実用段階まで持ってこれたという。それがＩＳの大部分を占める部品となる様な品質と性能を秘めているのだろうか。国が極秘で研究していたならまだ分かるが、それなら何故委員会の用意した機体に搭載されているのか。謎は深まるばかりだ。

「織斑先生！準備が完了しました」

「おっと、そうだったな。では君たちはオルコットの搬送とその護衛を頼む。私が織斑をどうにかする」

そう告げてゲートを出ようとすると引き止められる。ＩＳを装着した教員が不安そうにしている。

「大丈夫なんですか？織斑一夏は。せめてＩＳを一機連れて行った方が…」

「いいや構わない。曲がりなりにもあれは私の弟だ。なんとかするさ」

そういってアリーナ内に突入する。
一夏は依然としてＩＳを纏ったまま空を見上げている。それを横目にせっせと教員たちは担架にオルコットを載せて医務室に向かった。幸いこの学園はＩＳという兵器を扱っているので、医療設備も最先端の新型を導入している。更に医者も数こそ少ないが今年に入って凄腕が一人就任したのでオルコットは大丈夫だろう。

「おい一夏」
それよりもこの愚弟を如何にかせねばと一先ず声を掛けるがピクリとも反応しない。
『織斑先生！今ようやく織斑くんのＩＳにアクセスできました。しかし機体情報は読み取れない状態なのでバイタルをチェックします』
「ああ。頼んだ」
『それで現在の織斑くんなんですが、どうやらＩＳと繋がっているみたいです。精神が強く結びついているので無理に引きはがせば精神が崩壊する恐れが』
「なんだと！そんなことありえない筈だ。理論上不可能ではないが、そうするには操縦者とコアが心を通じ合わせる、波長を合わせる必要があるんだぞ。できるわけがない」
『とりあえず織斑くんはそっとしておくのが一番では？』
「そうしたいのは山々だがこのままにしておくと何が起こるか分からない」

何故自分の弟はこうも厄介ごとの中心に立っているのだろうか。疲れた様子で千冬はため息を漏らす。

何度呼んでも意識が戻ってこないので雨に濡れるのも厭わず近くに寄ろうとすると突然一夏は叫びだす。

「ガアアァァ!?」

頭を押さえ、首を掻きむしり、手にした刀を振り回す。その姿は正気を失った狂戦士。

「あああぁぁぁぁ」

「どうした一夏!?」

暴れ狂う、いやナニカから逃れる様に抵抗するが、ＩＳを纏っている状態でそんなことをしたら周りの被害は大変なことになる。ただ幸運なことにアリーナはＩＳの戦闘を想定してあるので頑丈な設計になっており、防音措置も完璧だ。そしてこの現場をその目で見ているのは千冬と山田先生だけだったことだ。

流石に手も付けられない様子だったので千冬はピットに戻って様子を窺っていると、三十分は経っただろうかついに膝をついたと思うと頭を垂れる。

もう大丈夫だろうとハッチの操作パネルを弄るが何故か開かない。まるで観客が舞台に上るなと言う様に。

ズキッと鋭い痛みが奔る

試合を終えると見知らぬ世界にいた。

真っ白な世界。

《ｌｅｆｔ》上も　下も　右も　左も《／ｌｅｆｔ》ない。

そして抑えつけていた何かが込み上げてくる。

何だろうこの感情は。知っている筈なんだ。とても懐かしい感覚なんだ。

だけど思い出せないんだ。

そう認識すると自分の内側から何かが零れ落ちる。

手にとって掬ってみるとそれはとても濁り黒ずんだ涙だった。

ここは何処なのか分からない。疑問は次々と現れるが消えることが無い。

そもそも何故自分は試合中に得体の知れない質問を快諾したのだろうか。

何処からか声が聞こえたそれが俺の疑問を解消する。

『それがお前の望みであり、お前自身が決めたことだ』
『この世界はＩＳコアの人格の持つ心象風景だよ。いや彼女の世界だ』
何を言っているんだ。
訳が分からない筈なのに何故か理解してしまう自分がいる。

そして世界に光がさす。
黄金のベールを越えた先には幻想世界が待ち受ける。
穏やかで澄み切った空。
時々雲が通り過ぎ、日差しを遮るのも心地が良い。
大地に風が吹き抜け、淡い緑の草木や花を揺らす。
瑞々しい自然の香りを風が運んで鼻孔をくすぐる。
そして目の前には大きな桜が鎮座しており、
その彼方向こうには白亜の城壁の城が聳え立つ。

違和感を覚えることなんて無く、自然にあるがままに受け入れる。
しかし、何かが違うのだ。
その光景に抱く思いが自分ではあるが自分ではないものが抱いているのだ。

怖い、恐い、コワイ。
自分自身がまるで他人のように感じる。
可笑しいな、この体は俺の物なのにどうして俺が恐れているのだろうか。
『当たり前だよ。それは君の物じゃあないからね。君は持ち主に返すために来たんだ。それに謝礼を、そして救いを与えられるために』

どういうことだ。
それじゃまるで俺が死ぬみたいじゃないか。
俺はまだやらないといけないことがあるのに。
『君がすべきこと?そんなものはもうないよ。だって今日此処に立ち、すべての返却をすることが君に課せられた使命だ』
違う。そんなはずはない。
俺は強くなって、守りたいと思える物を見つけて、手に入れるんだ。
『それはもう終えたじゃないか。漸く分かったかい?君は、僕たちは手に入れたんだよ、最愛のそれをね。だけどこの手から落ちてしまったから、彼は全てを投げ出して、破滅を求めたから君がいる』

ズキッと鋭い痛みが奔る
知らない筈がない。全部知ってただろう？
　そうだ、知ってたんだよ。
　ただ覚えてなかっただけだ。

ズキッと鋭い痛みが奔る
お前の見た現実は都合で塗り固めた夢だ
　この記憶も偽りを植え付けられた虚妄の夢。
　だから虚飾の箱は朽ちて無くなる。

ズキッと鋭い痛みが奔る
それもこれも出来の悪い贋作さ
　この思いも全て嘘でできていた。
　ただ一つの真実はこの痛み。

ズキッと鋭い痛みが奔る
そうだ、痛みこそお前の実在を証明する唯一の証

そうだな。行かなきゃならないんだ。

俺は返さなきゃならない、自分自身に。

『大きな桜の木の下。その祠に居るよ』

君もありがとう。導いてくれて。

『礼にも及ばない。私は己のナビゲーターであり、よき理解者だ』

〈彼〉には感謝しないとな。

ゆっくりと歩く。祠は近いから焦る必要もない。

これで最後になるからこの景色を胸に焼き付けたいんだ。

桜の根元に着くと、紙垂がかかっているおかげで入口が分かる。

桜の木の中が空洞になっているのだろう。

紙垂の暖簾を潜ると、中には少年と少女が椅子に腰かけ仲睦まじく過ごしている。

二人は来客に気付くと笑顔で出迎えてくれる。

「ようこそ。そして初めまして」

「ようこそ。そして久しぶり」
　こちらも頭を下げる。声を出さなかったが二人は満足したのか、椅子に腰かける様に言う。
「今日はどのような用件で？」
「もう言ったじゃない。止まった時計が直ったのだから、代わりの時計を返すのよ」
「ああ。そうだったかな」
　ええ、彼女が言うとおり今日は総てを返しに来ました。
「そうか漸くか。〈彼〉は元気かい？」
　はい、貴方との再会を楽しみにしていそうでした。
「酷いことは言われなかったかい？」
　いいえ、とても親切に接してくれました。
「珍しいな、彼奴が優しいなんて」
「そう？彼は少しだけ意地悪なだけよ」

　あははと二人は笑う。この幻想の世界だからこそ心が通じ合っているのだろう。私はその少年に引っ張られただけだからな。

「本当にいいんだね？くどいようだけど」
構わない。私はそちらの人生の方が好きになれそうだ。
「ありがとう。さようなら」
「さようなら。彼の代わりをありがとう。お疲れ様でした」

目の前が白くなる。心地よい温かさに瞼が重くなり目を閉じる。
桜の花弁が舞い散り身を包む。別れ花のようだ。
『Ne m'oublie(私を忘れない)z pas(で)』
ああピッタリじゃないか。
みんなは私を知らないだろうけど自分だけは覚えておいてほしいな。

目が覚めた。長い長い眠りだった。
そして帰って来たんだ。総てを取り返しに。
ズキッと鋭い痛みが奔る
ああ、彼が味わってきた痛みか。
「そして今度は思い出すのではなく、刻み付ける様に、か」

顔を打つ雨は止んだ。
今日は晴れない筈なんだがまあこっちの方がいいな。

今宵が始まりなんだ。
雨は止み、月が薄い雲に隠れ掠れている。
朧月は儚いからこそ魅入られる。

幕間劇

「おはよう一夏」

耳元で囁かれた言葉に一夏は上半身を起こして周りを見渡す。

隣のベッドでは簪がスヤスヤと眠っているのでその声の持ち主は彼女ではない。

寝起きで頭が回らないが記憶を漁る。

たしか昨日はオルコットと試合を行い、勝利を掴んだ。

そして、その後の事で精神的に消耗し、寮部屋に帰るなり眠ったのだ。

ベッドから降りて警戒しながら部屋を捜索する。

玄関の鍵口には開けられた痕跡はなく、窓にも細工はされていなかった。部屋で怪しい所は全て探したが何処にも異常は無かった。

「妙だな。俺は確かに声を聞いたぞ」

インスタントコーヒーを作りながらも彼は警戒を怠らない。

それにしてもこの部屋には自分と簪しかいない筈なのだ。なら先程の声は一体なんだと不気味に思う。

まるで実体を持たない幽霊のようだ。

そんなことを考えるが鼻で笑う。理解の及ばないことには必ず理由があるのだ。そんなもので片付けるなどそれこそ馬鹿馬鹿しい。

周囲の環境に原因がないのなら、その異常は自分自身にあるのだ。ならば幻聴なのだろうか、昨日は色々な事がありすぎた。体にも負担がかかっていたし、まだ本調子でもない。三年の空白を埋めるのには時間がかかるのだ。

「そんなに怯えないでよ、傷ついちゃう」

「誰だ?どうやって此処に入った?」

また聞こえた。今度はつい先程まで眠っていたベッドの方だ。視線を其方に向けるとそこには白いネグリジェを着てベッドの淵に腰掛けている少女がいた。

１２か１３ぐらいだろうか。身長は低く、幼さが色濃く残っているので中学生ぐらいだろう。肌は色白、髪は烏の濡羽色であり、その瞳は澄んだ青色。小柄で華奢な四肢は強く握ると折れてしまいそうだ。

可憐な容姿をしている少女に一夏は言葉を失う。

その少女は目が合うと微笑みを浮かべる。それはとても優しく温かいものだった。簪が彼に向けるような、いやそれ以上に自然な感じだ。とても初対面とは思えない行動。

君は誰だと声に出そうとするが頭痛によって言葉に出来ない。
「落ち着いて。まだ記憶が混乱してるの。無理に思い出す必要はないわ」
「何故だ？どうしてそんなことを言う」
「だっていずれ思い出すのよ。なら急がなくてもいいじゃない」
「つまりわけを話す気はないと…」
疑問は尽きないが一夏は敵意を感じられなく、無害と判断した。取り敢えずコーヒーを飲み、正常に働き出した脳で思考する。
「何の目的でここにいるんだ？君のような生徒はこの学園にいた覚えは無い」
「そうだね、私はここの生徒じゃないよ」
「なら教員に告げ口されたら困るんじゃないのか…？」
「そうかもね。でも君は話さないと断言するよ」
「おかしな奴だ。じゃあ話を戻そう。なにをしに来た？」
「…ただ話をしにかな」
少女は本当にそのつもりで来たのだろう。手招きをして隣に座るように一夏に言う。言われたように一夏が隣に腰掛ける。
どちらも口を開かずに静かな時間だけが過ぎていく。静寂に耐えかねた一夏が話しかける。

「…コーヒーは飲むかい？」
「いえ、喉は乾かないから大丈夫」
　漸く決心がついたのか少女は真剣な表情で疑問をぶつけてきた。
「ねえ、一つ聞きたいんだけどさ。なんで彼女と住んでいるの？」
「えっと、それは、まあ成り行きかな？」
　へえとその返事が気に入らなかったのか不機嫌になって少し素っ気なさが現れてきた。何が知りたいんだろうかと益々一夏は少女の事が分からなくなった。
　でも、と言葉を続けて、少女は質問をやめない。
「抵抗は無いの？」
「もちろんあるさ。だけど仕方がないよ。彼女の頼みは断れない」
「本当にそうなの？君が勝手にそう思ってるだけじゃないの？」
　少女は質問と一緒に顔を近づけて此方の顔をよく見ようとする。この何故だか始まってしまった質問で少女はどんどん一夏の中に踏み込んで来る。
「だって彼の記憶は植え付けられていたじゃない」
「そんなことを言ったら君自身も俺の見ている夢か幻覚かも知れないよ」
「そう思ってくれても構わないわ。どうせ私の存在を証明することは出来ないだろうから。ただ覚えておいて。私の言うことに嘘偽りはないよ」

可笑しな話だ。現実ではないと否定されてもいいと言いながら信頼を寄せているなど。ついに一夏は我慢できずに彼女に問う。
「君は俺に何を伝えたいんだ?」
「全てを疑って欲しいの。人を、嘘で彩られた現実を」
嘘?世界なんて嘘で成り立ってるようなものだ。優しい嘘や醜い嘘、嘘なんて沢山あるというのになにを疑って欲しいんだろうか。
「それは、何故だ?」
「それが真実に繋がるから。君が中心にいるのだから、君が動かないと回らないの」
「…意味が分からない」
真実とは一体なんなんだ。どうして君はそんな事を俺に教えるんだ。考える間も無く分からないと答えは出るのに考える。
「それでいいの。ごめんね、そろそろ帰らないと」
「なんだ、突然に。聞きたいことはまだまだあるんだが」
腰掛けていたベッドから立ち上がると彼女は名残惜しそうに言う。
「私ももっと話したいけれど、時間が無いの。もうすぐ簪も起きるわ。だから最後に教えてあげる。これは現実だったということを」
口が塞がれる。ベッドに腰掛けていたので身長の低い少女でも簡単に接吻できたの

だ。一夏は突然の出来事に戸惑った。
目の前には少女の顔があり、何処か知っている花の匂いがする。その唇は柔らかく、その感触は唇が離れた後も残り続けた。
惚けているといつのまにか少女は消えていた。飲んでいたコーヒーは冷めきっており、全ては現実に起こったことだと証明している。
「んんー。一夏？誰かと話してた？」
「いや、独り言さ。気にしなくていいよ」
簪が起きたようだ。昨日は風呂に入っていなかった事を思い出しシャワーを浴びに浴室に行く。

薄暗い部屋。天井に取り付けられた照明は使われていない。だがこの部屋に置かれている沢山の大型ディスプレイと機材の山がそれぞれ光を撒き散らし、この部屋を闇で埋め尽くさないようにしている。
明らかに目が悪くなるような環境だというのに、此処の主はそんなことを気にしていないようだ。大きなディスプレイを並べた前で椅子に腰かけ、忙しなく指を動かしてキーボードを叩いている。
そして今は何かに興味を持ったのか一つその画面も複数に分割されているのだがの

画面に注目しているようだ。そしてその画面の中の情報だけでは満足できなかったのか、手元を動かしカチャカチャコマンドを入力する。追加で出てきた情報を流し読みすると、漸く手を止めて大きく伸びをしてから、背もたれに体重を掛ける。

「どうしてだろう。記憶が戻ってきちゃってるよ。もしかして、もう目覚めたのかな？ありやりゃ参ったなー。できれば完全に修復できてから合わせてあげたかったのに」

顔に手を当ててぶつぶつと呟いてるのは思考を纏める為か、口早に単語と文章を虚空に吐き出している。

「予想外の事態。対処するにはシナリオを早めなければならない。試合はいっくんがイギリスの候補生に過剰な攻撃。日英の衝突は免れない。件の操縦者に対しての処分に妙な動き。王室付近に脈がある模様。要チェック。日本上層部にも怪しげな行動が目立つ。情報なし。収集にリソースを大幅に割り当てる。クラッキングの成果なし。ネット媒体に記録されていないと思われる。白式の変化：予定されてない進化。細工された可能性が高い。原因究明。解明完了：正体・所属不明の部隊が輸送直前に工作。コアネットワークログ参照。判明：部品のインストール。白式コア解析。完了：コアナンバー［００１］の反応確認。異常を確認。精査：コアナンバー［α１］の反応検知。コア同士の結合を確認。仮定：不完全なα１を００１が補助したことでいっくんに干渉したと思われる。更に他のコアにも影響を…」

暫くして一段落ついたのか、口を閉じて立ち上がり部屋を出ていく。

部屋を出て少し廊下を進み、一際頑丈な造りの部屋に来た。そこのドアの顔認証システムをパスして部屋に入った。

部屋中には配線が張り巡らされており、大きなガラス張りの円筒形の水槽とも呼ぶべきものが置かれていた。その中は液体で満たされており、1人の少女、いや高校生ぐらいの女の子が入っていた。

目を閉じて、呼吸器をつけられており、まるで植物人間のようだった。

その容器のすぐそばには操作する為の機械が取り付けられており、銀髪の少女が立っていた。

「どう、クーちゃん?」

「肉体のあらゆる器官に活性化が見られます。傷はほぼ完治しており、あと一ヶ月もしたらこの機械も必要なくなるでしょう」

目が見えていないのだろうか、顔を合わせてもずっと目を閉じている。だが機械を操作することに迷いはなく、慣れている手つきだった。

「そっか。意識の覚醒に伴って、肉体の覚醒も早まったのかな。私の予想を裏切ってばかりだな…、いっくんたちは」

「何かご不満でも？」
憂いを帯びた声に心配そうに銀の少女は話しかける。
それに対して自嘲と後悔の念を込めて答える。
「いや、まさか！世界が全部私の思う通りに動くならＩＳだって普通に受け入れられたさ。クーちゃん。私はね、人っていうのは単純ながらも複雑で、そんなところが嫌いなんだけど、好きでもあるんだ」
「すいません。わたしには難しいです」
少女は首を振って答える。彼女には嫌いと好きは正反対のものとして捉えているのだ。
「いいかい、クーちゃん。好きというのは関心を持っている事であり、嫌いというのも関心を持っている事に他ならない。だから、好きの反対は無関心と言われるんだよ」
「なるほど、ですか？」
「んー、まだクーちゃんにはわかんないかな。仕方ないな、可愛い娘の為に私の事を話してあげようではないか」
「私は世間では世の中を荒らしてから無責任に姿を消したと言われている。だがそれは、世界に興味を無くしてしまったからなんだよ」

「世界は沢山の意思や思いで出来ていて、たちの悪いことに大体の有権者は己の欲を満たすことや自己満足の為にその力を振るうのさ」
「私にはそれが辛いことで、しかしどうしようもないことだったから逃げて、そしてそれらの関わりを拒んだんだ」
「だけど個人は別さ。それは私でも影響を与え、変化させる事が出来る。そして、私自身を受け入れてただの人としても扱ってくれるのさ」
「かあさまは、特別扱いが嫌い、なのですか？」
　それはとても純粋な疑問だった。大人びている少女にも年相応な反応をしてくれて嬉しくなったのだろう、陽気に答える。
「どうかな。人っていうのは、自分には無いものを欲するんだよ。凡才な人には自分が特別だって、他人よりも優れているんだって示したくなる」
「だけれど私は普通というものが知りたかったんだ。クーちゃんを義娘にしてお母さんになったのもそれが理由かもね」

篠ノ之箒

私は織斑一夏が好きだった。

私の家は神社兼道場だった。

そこで父は神主をしながら地域の子供たちに剣道を教えていた。母はその父を支え、厳しい父の代わりに優しくしてくれた。

そして私には年の離れた姉がいる。姉は一言でいうと天才だった。色んなことを知っていて、器用であり、優しかった。

しかし、髪の色が父とも母とも違い、その女の私ですら見惚れる容姿と恵まれた才能は、悪意を持った人たちにとって邪魔なものでしかなく、また叩くことに適した材料でもあった。それで学校では嫌がらせを受けていたらしい。

だけど私は知っている。姉はどうしようもなく優しかったのだ。だから、イジメられている子を放っておけなくてついつい助けてしまう。だから小さい子達には人望があった。

そしてその性根は恐らく心を閉ざした今でも変わっていないのだろう。

私はそんな姉が好きで、そして嫌いだった。

姉は私にとてもよくしてくれた。理解できなかった勉強も分かるまで優しく教えてくれた。友達のいなかった私に懐いていた子供たちと引き合わせてくれた。

だけどその才能が、優秀さが私を歪めたのかもしれない。

姉の才能を知った親族や両親の知り合いは、私に目を向けたのだ。お前はどんな才能を持っているのだと言いたげな目をしてたのを覚えている。

それは私が姉のようにできが良くないと知るとすぐさま侮蔑の目に変わった。その期待の重圧に押しつぶされてしまった私は姉から離れた。恐らく剣道を選んだのも巫女を選んだ姉とは違う方向に進みたかったからだろう。

そして私は姉を拒絶した。その後も何度も何度も救いの手を差し伸べられても拒否し続けた。貴方がいると私は私ではいられなくなると感じていたから。

だから言ってはならないことまで言ってしまった。

「貴方さえいなければ」

期待と侮蔑の眼差しに怯えた私は家族以外との関わりを絶った。そして剣道を始めて、私は父のような人に憧れた。

厳しい人だった。だけどそれは、その人を思って厳しくしていたに過ぎない。だから

色んな人に好かれている。
だけど未熟な私の見様見真似な態度は、周りから見たら傲慢で乱暴な子供に見えていたのだろう。それが学校でイジメられていた原因なのだろう。私はどうすれば良いのか分からなかった。私には他に何もなかったから。父のようになれないのなら母のようにと思ったが、その優しさを向ける相手は私の側には誰もいなかった。
独りの私。優しさゆえの厳しさも、純粋な優しさも持てない私はただ健気にも自分を強く見せてイジメられないようにと愚かにも考えた。それが火に油を注ぐとも知らずに無邪気にいい案だと思っていた。

止まない罵声、止まない嫌がらせ。疲れきった私の前にある男の子が現れた。その男の子、織斑一夏は私を助けてくれたのだ。しかし、その救済は何も意味はなかった。
私が孤独なのは変わらないからだ。だけど彼ならば私を受け入れてくれるのではないかと、希望を持ってしまった私は彼を追いかけた。
だがその先で見たものは希望ではなかった。
彼もイジメられていたのだ。それは私と同じと思ったが彼の周りには人がいた。そしていつも側にはある少女がいた。そして、私に構うことは無かった。
嫉妬から少女に突っかかったこともあった。少女は困った顔をしたが、やがてあどけ

なさの残るが慈愛に満ちた表情で、
「友達になろう?」
と手を差し出した。小さくて弱い私はその手を弾いてしまった。それを見た一夏はもう私と口もきかなくなった。

それを私は裏切られたと思った。
貴方は私と同じだと思ったのに。
貴方なら私を拒絶しないと思ったのに。

その幼心に抱いた淡い恋心は彼の近くから引き離されていると、いつしか憎悪に変わっていた。
どうしてだろう。どうしてだろう。と考えるたびに彼が憎くなってしまう。私の世話を担当する人はその思いをいつも聞いて宥めてくれる。だが根本的なものは変わらない。
私が独りだということは。
あの時、あの少女の手を取っていればあるいは…